
囲われた少女の瞳に映る外

洒流奇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

困われた少女の瞳に映る外

【Nコード】

N6630T

【作者名】

洒流奇

【あらすじ】

何も信じない中3少女、陸々可未兔^{ろくろくかみと}。因みに一人暮らし。

特徴：黒髪ショートカット、黒い瞳に巨乳、脚が細長くて…取り敢えずスタイル抜群。

性格：思った事は口に出す。

可未兔が学校の帰りによった河原で出会ったモテ男、涙香和奈留茂^{なにかわるも}と繰り広げる恋愛物語。

涙香和の特徴：ボサボサ茶髪、身長高め。

性格：面倒くさがり屋。元気。

出逢い（前書き）

ちゃんと使い慣れてませんので間違っ
て同じのを何回か出て来る場
合が多々有ります。スイマセン…。

出逢い

放課後、可未兔は教室（3―D）で読書をしていた。

「…ほええ。なるほど」

本をパタツと閉じると帰る準備をする。

（どうせ帰っても誰も居ないってか、）

（一人暮らしだし）

（河原でゆっくり日向ぼっこでも）

何をするか決まった可未兔は鞆を手にして誰も居ない教室を後にした。

（自然って、）

（サイコー）

河原で現在進行形で日向ぼっこ（？）をしている可未兔は満足していた。

（五月蠅いの、）

（居ない）

（静かで）

（気持ちいい）

いつそ此処で寝るかと思った可未兔はゴロンと寝返りをうつた時に、

「ふう…人気者は辛いな…」

物体では無く、生き物が居た。

「んっ？あっこんにちは。いや、こんばんはか？」

こっちに向けられた顔はニヤニヤ笑っていた。

（髪は茶髪、顔立ちまあ普通、）

（多分普通のいきも…女子から見たらイケメンとかか？）

（まあ、）

（どうでもいい）

「おっその制服は…蓮木中か？てか女子が何で河原に？」

（…）

（面倒。と思う）

「構わないでしょう。河原に女子だろうが男子だろうが何だろうが寝ているのは別に变ではないでしょう。それとも女子は河原に来てはいけないとでも？では男女平等何とかが有るんですからソレを消したら？まあ無理だろうけど」

体を起こして、立ち上がる。

「迷惑かけましたね。さようなら」

歩き出そうと一歩踏み出すと、

「ストップ」

腕を掴まれる。

「…何ですか」

思わず睨みつける。

「アハハハッ」

男は笑い始める。

「…ほえ？」

「意外と面白いね」

（楽しそうな顔は無邪気な子供みたいだな）
（何だよ…）

「君って何処のクラス？」

「ハッ？」

「何処のクラス？」

「D組だけど…？」

可未兎は首を傾げてみる。

「奈留茂くくくん」

ハートが付きそうな甘い声×大声が可未兎の耳に届く。

「逃げたのにな…因みに何年生？」

「…3年生」

「そっか。じゃあねえ」

可未兔の頭をポンポンと叩いて走り出す男。

（…何だっただんたろう？）

取りあえず女子の大群がコツチに来ているのが分かったので河原で身を潜めた。

「アレッ！？奈留茂君は！？」「コツチに居たわよね？」「アッ彼処に居るのは！！！」

一人の女の子が指差した所にはさっきの男が走っていた。

「…奈留茂くっくん！！！！」

女子の大群が走り去った。

夕日で赤くなつた空が全てを覆っていた。

――宜しく――（前書き）

やり直しました…

スイマセン…

――宜しく――

――次の日――

可未兎は何時も通りの時間に登校して、ゆっくり自分の席に腰掛けた。

そしてお気に入りの本を取り出して読もうとした。

（まだホームルーム始まらない）

（安心）

「おい？」

（何？空耳？）

「おい？」

可未兎のクラスメートは大半違うクラスに出張しているので可未兎が教室に入った時には誰も居なかった筈。

（誰？）

その疑問を解消すべく顔を上げる。

「聞こえますかー？」

昨日の男が居た。

（うえっ…）

（聞こえないって）

（言いたい…）

可未兎は顔を分かりやすく歪ませた。

「…その顔は酷くないか？何も俺してないけど」

「何でしょうか？私何も悪い事はしてませんよ？とゆうか貴方は誰ですか？」

「…えっ？俺の事知らないの？」

「ハイ。どうでも良い事まで覚える事が出来る程私の脳みそは素晴らしいありませんので」

「俺ってどうでもいい男？」

男は自分を指差す。

「どうでもいい生き物です」

人間から格下の生き物表記する可未兎。

「そんな…結構有名な筈なのに…俺…人間だし…」

しょんぼりうなだれる男に秋馬は、

「そうでした。申し訳ないと思ってます」

悪びれずに本を開いた。

「俺有名人なんだよ？」

「おはようございます、有名人さん。あいにく私は有名ではありませんので違う方の所に行って下さい」

「だって…違う人は…」

「『奈留茂くん』」

廊下からダイナミックボイスが可未兔の耳に響く。
可未兔は思わず耳を塞ぐ。

「俺が来たって言わないでね！」

男は掃除用具入れに体を収納した。

「あれっ？奈留茂君が居ない？」

頭を覗かせて教室をキョロキョロする女子群。

「その女、奈留茂君知らない」

「奈留茂君？どちら様ですか？」

可未兔は別に男の約束を守ろうと思って居なかった。
ただ単純に――

（奈留茂って誰？）

「うーん…屋上かしら？」

頭30度傾けて教室から出て行く女子群。

（邪魔だな…）

静かになった教室。

バンツと乱暴に掃除用具入れが開く。

「サンキューな。まぢありがたいね」

「…そういえば、」

「何？」

「貴方誰？」

机に倒れている本を手に取り、可未兎は視線を男に向ける。

「俺？知りたい？」

「別にどっちでも良いです」

（関わらない為に名前を知りたいですね）

「俺は泣香和奈留茂。宜しくな！お前は？」

親指を立てる奈留茂。

「陸々可未兎です」

苦笑いしながら可未兎は答えた。

2人の未来は、

狂いだす時計の様に、

歪み始めた。

決断（前書き）

何かこうした方が良くって言うアドバイス求めています…。

決断

結局奈留茂はその後戻って来た女子群に気付かれ教室から泥棒の様に逃げて行った。静かになった教室には他クラスに出張していた男女が戻って来て教室はまた五月蠅くなった。

(…)

(静かになったのに…)

「陸々さん、また教室に独り？」

ポニーテールの女子が座っている可未兔に話しかけた。

「…悪いですか？」

可未兔は頭を傾げて低いトーンで応える。

「いやっ…ごめん…」

気まずそうに顔を歪めた女子は自分の席に退散した。

(…?)

可未兔は大半の行動は無意識の為、全く女子の行動が理解出来なかった。

(まっ良いや)

ガラガラ

ドアが開く。外から白髪のひ弱そうなオジサンが入って来る。

「起立。礼」

委員長の言葉に合わせて操り人形の様に頭を下げ、素早く席に座る生徒達。

「今日はなあ……」

間延びした口調でスラスラ事務的に話す先生を可未兎はただただ普通に外を見ていた。

「起立。礼」

何時の間にか伝え終わっていたのか再度委員長の言葉が教室に響く。お辞儀をした秋馬は――
変わらない日々を送ろうとした。

「起立。礼」

最後の授業が終わると机を動かす音で学校が埋まる。

「さようなら――」

生徒達の挨拶に先生は頭を下げると言う変わらない動き。

「さようなら」

可未兎も変わらない単調な挨拶をし、変わらずに学校から立ち去ろうと教室から出て、靴箱に向かう。

靴箱に着き、上履きを脱いで靴箱の中に投入して、ローファーをさあ履こうしようとして床に置いて足をローファーに収めて―

「可未兔」

収めて、何故か何時もとは違う事が起こった。

（この声…）

「どうした？一緒に帰ろうよ？」

「…ハッ？」

可未兔は理解出来ない。

（男子が女子と一緒に帰る？）

（それを行うのはカップルか余程異性が好きな馬鹿です）

（私は―）

（違います）

「人気者の貴方が何故私に？そして貴方のファンの方は？」

「部活じゃないかな？」

「…最初の質問に応えて下さい」

「？面白そうだから？」

「…」

（この人も―）

（そんな人なのか）

（残念だ）

「どうした？」

「いえ。では」

早歩きで足を進めた。

「ちょっと待って！」

肩に手を置いて奈留茂は可未兔を止める。

「…何ですか」

「何だよ？どうしたんだよ？」

「私は一人で帰りたいんです」

「何で？」

「…」

（…何でだろう？）

可未兔は頭を傾げた。

「何となく」

「…じゃあさ、」

奈留茂は可未兔の華奢な手を取ると、走り出した。

「うえほはっ？何処に行くんですか？」

驚いているが、冷静に聞く可未兔。

「河原」

可未兔は足を止めて奈留茂を止めようと考えたが、
（意味ないか）

「どうしたんだーい？」

間延びした声に少しイラッときた可未兔だが、気持ちを抑える。

「てか疲れてない？」

（確か）

（この人はサッカー部だから、）

（体力有るのか）

「大丈夫です」

（疲れてないから、）

（離してくんないかなあ…）

「そっか。良かった良かった」

満足そうに頷くと更にスピードを上げる。

そしてほぼ全力疾走をした二人はたったの三分で河原に着いた。

「いやぁ走ったね！」

「…フウ…ですね」

肩を上下に揺らして荒い息を吐き出す可未兔は河原に寝転がる。

「…あのー」

「何ですか？」

立ったままの奈留茂に可未兔は視線さえ向けずに目を閉じた。

「…スカートなのに寝転がって良いんですか…」

可未兔は目を開き、スカートに視線を向ける。

基本、可未兔の学校は少し短いスカートである。

そして長い脚を持つ可未兔がそのスカートを着ると、更にスカートの長さが短く見える。

「別にパンツ見えてませんよ？」

「いや、せめてそこは下着って…」

苦笑しながらも奈留茂は横に腰掛けた。

「何で私に関わるんですか？」

ゴロンと横に転がり、顔を奈留茂に向ける。

「面白いし、可愛いし」

「…可愛い？」

可未兔は思わず頭を傾げる。

（私が面白いってか変なのは認めるけど…）
（可愛い？）

「もしかして無自覚？」

「可愛いって意味分かってますか？」

「綺麗な子に言う言葉でしょ？あってるじゃん」

「私に当てはまってません」

「可愛いよ」

可未兔の頬に手を当てる。

「…？どうしたんですか？」

普通この場面で女子がやられたら顔が赤くなるところだが…
可未兔はそこらへん疎い（うとい）為…
理解していない。

「…可未兔は何も感じないの？普通は…ねえ？」

予想以上の可未兔の無関心に奈留茂は、

何を言っていていいか分からなくなった。

「感じる？何を？そういえば何で名前で呼んでるんですか？せめて呼ぶなら“陸々”と言ってくれませんか？」

「…何で陸々って言わなきゃなんないんだよ。よそよしいじゃん。てか笑って」

可未兔が動揺もしないので諦めた（あきらめた）奈留茂は手をそつと離れた。

「よそよしいって…元々そんな仲が良い訳ではありませんし、」

「しっ？」

「名字で私を…縛って下さい」

「はっ？」

「私を縛って下さい」

「えっ…？マゾ？」

場違いな質問をする奈留茂。

「マゾですか…。違いますけど」

鞆から携帯を出して時間を確認すると可未兔はゆっくり立ち上がり、頭を下げた。

「時間なので帰らせて頂きます」

背を向け、足を動かそうと――

「ストップ！」

「…何ですか？」

可未兔は振り向いて、

抱きしめられた。

「ほえっ？」

呆けた声を出す。

「ちょっと…はっ離して下さい」

体をつねらせて奈留茂の手から逃れようとする。

「やっと、」

頭上からの声は落ち着いている。

「？」

「やっと違う顔した」

可未兔は理解出来ない。

今まで理解しようとも思っていなかったが、
理解しようと思ったところで、
理解出来なかった。

「……？」

「もーさ、」

腕の力が緩む。

「何で何時も無表情なんだよ？少しは違う顔しようよ」

「……」

「そーんな苦笑とか今の顔じゃなくてさ」

小さい子の様に頭に手を当てる。

「何時かその顔に、」

「お花飾ってやるから」

決断したような言葉。

「……」

「今の驚いた顔で満足したと思わないでね？」

優しい声と、

幸せになるような笑顔で。

「私は…」

それに対して可未兎は――

「笑顔をさせるなんて不可能です」

無表情で応えた。

二人の決断。

—変わる日常—（前書き）

漢字間違えてたらスイマセン…

― 変わる日常 ―

それからは―

奈留茂は女子群の目を盗み度々可未兔の所に足を運ぶようになり、
可未兔はそれから逃れるように屋上の水などが詰まっているタンク
の元に隠れて―

つまり、

可未兔の日常は少し変わってしまった。

（迷惑）

（こっち疲れる）

（つまり無駄にエネルギーを消費、）

（貧乏な私は金が減る）

（うえ…）

「見―つけた」

タンクに身を潜めていた朝―
とうとう見つかった。

「…」

「何で逃げるんだよ？俺悪い事してないじゃん」

（した）

（私のエネルギーを消費）

（した）

「お―い？どうした―？」

「他の人に…見つかってませんよね？」

「勿論♪」

その言葉を聞いた可未兎は安心したように立ち上がった。

「…何で？」

「？」

「私の事を気にするの？ ほぼ一週間貴方から逃げて、否定している私を」

「そりゃ、」

「興味本位ならやめて下さい。そうゆうの—好きじゃない」

可未兎は奈留茂の姿を瞳の中に収める。

奈留茂の全ての行動を—

映す。

「一樣、私の考えをお伝え致します」

可未兎は一拍おいて、
告げる。

「今まで関わってない人と話し掛ける、などの行為は—その話し掛けられた人の日常を、傷付ける。ですが、その『話し掛けられる』という行為に慣れてしまえば、それがもう日常。それと、その傷付け方も問題がある場合が有ります。その人の日常を変えない傷付け

方も有りますし、全く正反対に変える傷付け方も有ります」

淡々と気持ちを伝える。

何時も通りの――無表情で。

「……」

「私の言いたい事が分かりますか？つまり、私が言いたい事は――」

精一杯相手の気持ちを壊して。

「私に関わらないで。私に話し掛けしないで。私に馴れ馴れしくしないで。私に何もしないで。私の――」

「日常を壊さないで」

伝え終わると奈留茂に背を向ける。

背を向けた時、少し淋しさ、悲しみ、悔しさが可未兔の足を止める。

（駄目）

（私が人として唯一生きれる方法）

（それが、）

（コレ）

（私は、）

（独りで生きなきゃならないんだ）

可未兔は目を瞑る。

そして、開く。

まるで、

全てを忘れた―全てを否定した―全てを欲した―全てを―
壊した鬼の様に。

（さあ、）

（戻ろう）

（私の日常に）

（讃えよう）

（私の日常を数日壊した人間に）

（では―）

（さようなら）

可未兎は一步前に進んだ。

そう、

進んだ筈。

でも、可未兎の片足は地面に触れる前に宙に浮いた。

可未兎は肩に何か触れられている感触を感じる。

そしてその感触の有る場所から、

後ろに引っ張られた。

体の重心が後ろに傾き、体が倒れそうになる。

そして、

可未兎の体を、何かが支えた。

「いきなりどうしたんだんだよ」

頭上からの温かい声は“何か”に飢えている可未兎を潤す。

「確かに、俺の我が儘でお前の日常を壊してるかもな。でも、」

奈留茂は一拍おいて、告げる。

柔らかい、温もりを持つ今抱いている少女に。

「でも、つまり俺の日常も打破している訳だ。お前は自分だけが傷付いていると思ってるのかもしをねーけど、」

奈留茂は少し腕に力を入れる。

「他の奴だつて傷付いてんだ」

「…ますよ」

「んっ？」

可未兎は奈留茂の筋肉質な腕に自分の細長い指を当てる。

「知ってますよ…。知っているからこそ、私は拒絶する」

奈留茂の腕に触れた指は冷たい。

「私は無意識の内に、他を傷付ける。そう無意識。相手は簡単に崩れる。私は崩れない。この違い、分かりますか？私は他の人とは違う。根本的に。最初から。産まれた時から」

「そんな事、」

「無いつて言いたいんですか？分かってませんね。取り敢えず言つとくと、私は、他人を壊したくありません」

「…」

「離して下さい。朝のホームルームが始まっちゃいます」

「俺は、壊れない」

「えっ？」

「俺は壊れないよ」

「…」

「ぜってえ壊れねえ」

「でも…」

可未兎は奈留茂の言葉を受け入れたくないのか、口を震わせていた。
(嘘つき)

「俺は壊れないから、なっ？」

数日前体験した他人の温もりは何も感じなかった。
数日前は。
今もそんなハッキリ分らない。
けど、何か感じる。

(?)

「俺はお前なんかに負けないからな。俺とお前の対決だ」

「…」

「分かったな？」

「…」

可未兔は頷きもせず、ただ俯いていた。
奈留茂は可未兔を解放する。

「馬鹿」

「んっ？」

可未兔が小さく呟いた言葉は奈留茂には聞こえなかった。

「何でもありません」

可未兔はキツパリ言っていると教室に戻ろうとした時、

「「「奈留茂くん？」」「」」

甘い声が扉から響く。

「アレッ扉が閉まつてる？奈留茂君と誰かの声か聞こえたのに？」

そんな皮肉めいな言葉が可未兔の耳に伝わると、

扉が開いた。

扉の問題（前書き）

皮肉めいたを皮肉めいなと書いちゃいました…。
スイマセン…。

扉の問題

―ファンクラブ会長・龍巻霞視^{たつまきあられ}点―

（この頃、奈留茂君の様子がおかしい。
三年のクラスを一つずつ見回ってから霞は自分の腰に手を当てる。
周りの会員は辺りをキョロキョロ見渡している。

「龍巻さん…奈留茂君何処でしょう？」

会員番号：61の狭山小路^{なやまじみち}が霞の横に並んで自分自身の顎に人差し指を向ける。

「何時も逃亡しますけど…何か違和感有りませんか？」

「何が？」

「奈留茂君が私達に挨拶もしないで逃亡する事は一回も有りませんでした。しかもその日らへんから…陸々さんが教室で見なくなりました…」

「陸々？」

「はい。あの以前『奈留茂は何処』って質問した子が居ましたですよ？あの子です」

「ああ…あの子ね。あの子が関係してるの？」

「…分かりませんけど…」

「まあ今日は最後に屋上でも調べて…朝は諦めましょう」

クルリと回って挙動不審な会員達に告げる。

「…はい…」

七十名のハモリは廊下に響く。

「うわあ…奈留茂可哀想やなあ…」

「あんなに人気だとな…」

教室からひよっこり頭を出した男子生徒達が顔をしかめる。
霰はそれを軽蔑した眼差しで見る。

「奈留茂君はあんた達とは格が違うんだよ。分かったらその腐った
脳みそをまともな脳みそに戻るように濱田先生はげせんせいのハゲ具合を調べて
きな」

「相変わらずキツいな…」

男子生徒達は顔をひきつらせてから元の場所に戻った。

「行きますよ！」

「…はい…」

再度見事なハモリを奏でると軽い足取りで屋上に向かう。

扉の前に立つ。

「だよ」

誰かの声が聞こえる。

この声は――

（奈留茂君だわ！）

ファンクラブの皆が目を輝かせる。

（この爽やかな声）

（あの方だわあ……♪）

ファンクラブの皆は一瞬自分の世界に浸る。

「」

女子生徒だとは思う高い声だが、内容が全く聞こえない。

（もどかしい！）

霰はドアを開こうとする。が、

（閉まってる！？）

この学校の屋上のドアは外から閉められる。

そこら辺はこの学校が設立された時に間違えてしまったらしい。

（クソッ）

「蔵王佳麻理^{さおうかまり}、鍵を！」

「はい」

髪をポニーテールに結んだ女の子が女子生徒を掻き分けて霰の元に
来る。

「これを」

ジャラツと金属音がすると霰の手には複数の鍵が置かれていた。

「ありがとう」

につこり笑うと霰は、数人のファンクラブの子と目を合わせて、

「「「奈留茂くん？」」「」」

甘ったるい声を出した。

扉をわざと蹴る。

「アレッ扉が閉まつてる？奈留茂君と誰かの声が聞こえたのに？」

扉の奥に聞こえる様に叫んで、

扉を開けた。

（さあて）

（奈留茂君を少しでも取ってくれた）

（お馬鹿な女は）

（どお〜こ？）

「どうしたんだんだよ龍巻さん？」

扉の先には――

探していた奈留茂が変わらない笑顔で居た。

「奈留茂君！」

ファンクラブの皆が奈留茂を取り囲む。

霰は近くに居た会員の一人に目で伝える。

「（他に誰か居るか探して）」

「（了解）」

数人の女子が散らばる。

「奈留茂君、さっき女の声がしましたけど、誰か居ましたか？」

可愛らしい笑みを作って奈留茂の手を握る。

「居ねえよ？もしかしてあれかな。ちょっと親に電話してた」

ポケットから携帯電話を取り出して履歴を見せる。

「本当に？」

「本当に」

奈留茂は爽やかな笑みで返す。

その時、『誰か』を探していた女子が霰の元に駆け寄り、耳元で口を動かす。

「（会長、）」

「（どう？）」

「（誰も居ませんでした）」

「（…そう。もうちょっと探してみて）」

女子はコクンと頷くとまた探し始めた。

「てかさろそろ行かねえか？ホームルーム始まっちまうし」

「ですね」

霰は奈留茂の横にベッタリくっついて奈留茂の腕を自分の胸元の前にセツトする。

「…それやめてくんねえか…」

「何の事でしょう？」

「…」

奈留茂は諦めたのか溜息を吐くと歩み始めた。

——可未兔視点——

「…やべえな」

奈留茂は顔をしかめる。

「時間稼ぎ頼みます」

可未兔はその顔を見ずにストンツと下りた。

「ちよっ…お前どうすんだよ」

「美術室に入ります」

「無理だろ！？いくら何でも此処は屋上だぞ！？」

「美術室のみ窓の上に屋根があります。しかも美術室は四階です。たった一階だけの差です」

「落ちたらどうするんだよ！？」

「大丈夫です。悪運は強いですから」

可未兎はフェンスを難なく越えて、

落ちた。

いや、堕ちた。

「…チクシヨ」

奈留茂はドアに向かった。

一方堕ちた可未兎は――

あっさり屋根に着地していた。

スカートのポケットから鍵を取り出す。

美術部の幽霊部員である可未兎は所持していたのだ。

最初から開いている扉を注意しながら足で開け、部屋に滑りこんだ。
「ふう……」

安心したように溜息を吐いてから窓を閉め、美術室のドアの鍵を開けてから身を潜める。

密室の部屋に居るのは怪しまれると思ったからだ。

（此処はフアンクラブの人間は通らない）

（先に教室に行きますか）

廊下に出て、持っていた鍵で閉める。

そして、教室に向かって足早に行く。

幸い、まだフアンクラブの人間は戻って来てないようだ。
椅子に素早く腰掛けると、鞆から本を取り出す。

「陸々さん。ちょっといいかしら？」

本のページを捲る可未兎の名を呼ぶ。

（予想範囲内）

（問題は此処からだ）

「貴方さっきまで何処に居ました？」

冷たい目が可未兎を捕らえる。

「図書室ですが」

対して可未兎はその女子の顔すら見ない。

本のみに視線を向ける。

まるで、女子の事などどうでもよさそうに。

「ちょっと！顔をコッチに向けなさいよ！」

「…何ででしょうか？」

初めて顔を女子に向ける。

「…もういいわよ。後で」

女子が去った。

（今日は終わった）

（そう、今日は）

（明日からが）

（問題だ）

オーストラリアからの訪問者により―（前書き）

此処まで読んだ方ありがとうございます。

引き続き『囲われた少女の瞳に映る外』を楽しんで下さい。

オーストラリアからの訪問者により―

朝のホームルーム―

「ハ―イ、コンニチハ！ワタシノネームは『ハートル・ウィッチ・ジョーダン』ヨ！ヨロシクネ チナミニ、ワタシは、オーストラリアからキタノヨ！」

ハイテンションな女性が居た。

（騒がしい先生が来たな…）

「ソレデネ、トウデエーイ、ロングホームルームで『オニゴツコ』をシヨウヨ！ユータチとフレンドリーにナリタイ！」

元気な先生から手紙が配布される。

『 部分的オーストラリアの鬼ごっこ

参加メンバー・三年生。

範囲：校内全て。

時間制限：三十分。

―ルール―

鬼は男子。男子は女子を捕まえたら、女子の頬にキスをして下さい。捕まった女子は体育館に行って下さい。

コレは賞品の為ですので、オーストラリアの鬼ごっことは関係ないよ

捕まったら賞品は諦めて下さい。

賞品：ノート十冊』

「オーストラリアのオニゴツコはタノシイヨ！」

にっこにこのジョーダン先生。

（部分的オーストラリアの鬼ごっこって…）

（何か意味有るのか…？）

（コレって好きな人暴露大会みたいなもんじゃないですか）

（でも、）

（賞品が）

可未兎は唾を呑む。

（ノートが十冊って…）

（五百円も浮く）

「先生ー」

委員長が手を挙げる。

「ナンデスカー？」

「何でキスをしなきゃなんないんですか？」

「オーストラリアのオニゴツコだからデス！」

ジョーダン先生は目をキラキラ輝かせる。

「嫌ですよ。不健全です」

顔をしかめる委員長。

（不健全って…）

（どっかの女子と良い感じと言っ噂を）

（流されてる男子が言っつか？）

「オォー…」

ジョーダン先生はふらりとゆっくり倒れる。

「先生!？」

近くに居た弱々しいオジサン先生が駆け寄る。

「ワタシがワンデー、ユーズした…ミーン（意味）が…」

「そうよ!可哀想よ先生が!」

一人の女子が立ち上がる。

（確か…）

（涙香さんのファンクラブの人だった気が…）

（ああ）

（なるほど）（キスされたいのね）

思わず吐き気が…という事で口を塞ぐ。

「今日から英語担当の先生なんだから優しくしなさい」

オジサン先生は皺を作って言う。

「…」

委員長は諦めたように溜息を吐いた。

（まあ）

（教育には悪いけどー）

（ノート十冊は大きい）

「ダカラ、ガールはキガエテネ！」

ウィンクを決めるとジョーダン先生はオジサン先生の隣に並んだ。前々から女の先生が来ると言われていた生徒達は、少し呆けていたが、皆嬉しそうに笑った。

（ファンクラブの人達は）

（テンション高いですね…）（でも、）

（私も燃えてます）

（絶対残るぞ）

「起立。礼」

委員長の挨拶で朝のホームルームは終了した。

お昼休み―

「陸々さん」

屋上で独り昼御飯を食っていた可未兔の名を誰かが呼ぶ。

「ふぁひ？」

口に玉子焼きを詰めた可未兔は振り返る。
ファンクラブの人間が居た。

（確か―）

「龍巻さんとうかなさいましたか？」

「あら。私の名前知ってたのね」

（知ってるも何も）

（関わるなリストの一人ですけど）

「ええ。ある程度」

可未兔は弁当に視線を移すとワカメサラダをつつく。

「光荣だわ」

「何の用ですか？」
にやみ

ワカメサラダを頬張る。

（次の授業まで後十八分）

（お昼寝で八分使うから）

（うん、余裕だ）

「奈留茂君以外に捕まって」

「奈留茂君？」
にやみ

「今日の鬼」
にやみ

「無理です」

カツカツ足音が可未兔に近付く。

「何でかしら？」

「だって―」

（ノートがあるから）

（捕まらない）

「会長！」

屋上に女の子が駆け寄る。

「奈留茂君が！」

「分かったわ。陸々さん」

「？」

離れていく霰を見ずに米を口に運ぶ。

「奈留茂君は渡さないから」

二人は去った。

「あの―…」

振り返り居なくなった霰に向かって言う。

「奈留茂とかじゃなくて欲しいのはノートなんです…」

可未兎の言葉は虚空を舞った。

鬼ごっこ…スタート！（前書き）

今回は短いです。

鬼ごっこ…スタート！

―体育館―

「ユータチ、オツケー？」

ジョーダン先生は頭を傾げた。

此処、体育館で始まりのホイッスルを鳴らして女子は逃亡。
男子は二分後にスタートという仕組みだ。

「ケータイ、ハブしてる？メアドをワタシとコウカンね！」

一人一人何故かジョーダン先生のメアドを所持しなければ、後何名
生き残っているか教えてもらえないという仕組み。

「ボーイタチはタクサンツカマエたら、ゴホービね！」

ジョーダン先生は興奮しているのかダンスを躍っている。

（頭が残念な感じですね…）

「ヨーイオツケー？」

子供の様な輝いた瞳を開いて笛を手にする。

「ヨーイ…」

『ピーー！』

ホイッスルの音と同時に女子は蜘蛛の子を散らすようにバラけた。

鬼ごっこへ前（前書き）

一様アクセス200を超えました。

ありがとうございます。

鬼ごっこへ前

―可未兔視点―

可未兔は屋上に向かった。

（美術部の部屋の屋根の上に隠れて）
（三分位は）

「てか…」

可未兔は振り返る。
後ろには―
女子の軍団が居た。

（何で男子に終われる前に…）
（女子に追われなきゃなんないんですか!?!）

「仕方がない…」

可未兔は曲がった。

「曲がったわ!」

女子達も曲がる。
が、

「…アレッ?」

そこには可未兔の姿はなかった。

「此処階段よ…?」

「手分けして探しましょう! 貴方達は下! 私達は上へ!」

ザザザァー

女子達の足音が無くなった階段は静かになった。

「…」

スタツと可未兔は床に着地する。

周りを見渡す。

(良し)

(居ない)

因みに可未兔が隠れていた場所は…階段の入口の上。
少しだけ足を乗せるスペースが有るのだ。

(賭けだったけれど)

(良かった)

ポケットに有る携帯が光る。

「んっ…?」

可未兔はゆっくり屋上に向かいながら携帯の画面を見た。

『男子が動きました』

「……」

可未兎は走った。

――奈留茂視点――

「ハアハアッ……！」

奈留茂は走っていた。

（何でだよ！）

奈留茂は頭を抱えていた。

（何でこうなるんだよ！）

因みに奈留茂が何故全力疾走しているかというところ……

「……奈留茂く……ん……」

女子に追われていた。

（てか何！？）

（俺鬼だよな！？）

（何で逃げなきゃなんねーんだよ！？）

「……私を捕まえて……」

女子達のハモリは奈留茂を恐怖のどん底に落とすには充分すぎる威力だった。

「NO――！！」

虚しくも奈留茂の言葉は女子には届かなかった。

――可未兎視点――

不明な女子達の視線を潜り抜けて可未兎は屋上に居た。
そして鮮やかに美術室の屋根に着地。

携帯が光る。

『開始三分の状態。捕らえられた人数十五名。残り六十五名』

「……」

（三分で捕まるって）

（どれだけ体力無いんですか）
可未兎はフウと溜息を吐く。

「まぢ何処に行ったんだろ？」

「……！」

屋根下からの声。

「だよねー。陸々さん何処だろ？」

「……」

自分のターゲットが上に居ることに気付いていないらしい。
（良かった……）

「もーさ、酷いよね。あの鈍感さ」

「だよねー。自分は男子に人気が無いって思ってるだろーけど、人

気だつて事を気付いてないなんて」

(…へっ?)

「まぢコツチのプライドがバキバキだよ」

甲高い声が可未兔の耳に響く。

「本当に最悪だよね」

(…)

(この私が?)

「しかもその可愛さで奈留茂君を落として」

「まぢ気分最悪だよねー」

(…)

(まぢですか)

ダンダンダン

大量の足音。

「やっぱ!」

「行こっ!」

二人の女子が消えた後、ガラツと音がすると…
男子達が入ってきた。

「あの二人は?」

「嫌だよ。顔フツーだし」

「でも雅樹まゆきと光太夫こうたふは行ったぞ？」

（教室内の人数は三人か）

「あいつら誰でも良い感じだもんな」

「俺はバリバリ陸々さん狙い」

「俺もだよ」

「俺も」

「チツ…競争率がハンパない…」

「仕方がねえよ。なんせあの美しさだもん」

「ハア」

（外まで調べないかな…？）

「ヨツと」

「…！」

男子が窓から頭を出した。

「下に居ねえかなあ？」

「そついや、全然見ないよな」

「他の奴らも見付けてねーし」

（そりゃ）

（此処に居るからねえ）

（屋上の鍵閉めたし、）

（誰にも見えない場所だし）

「チエツ…」

男子達が去る。

（…良かった）

体育着のポケットが輝いた。

（後何人かな？）

『八分経過♪捕まった女子の人数は、四十三人だよ 残り三十七人だにゃん 』

（メール打つ人が…）

（ジョーダン先生になった…）

（多分以前のまともなメールは…）

（違う人だな）

「ハッ…ハッ…」

校庭に集団が有った。

あれは…

「「「奈留茂くん、私のハートを捕まえて」」」

「嫌だよー!」

奈留茂と女子達。

(…)

(あいつ鬼でしたよね?)

「助けてー!」

奈留茂の哀れな姿に何も感じない可未兎は体育座りをした。

(後、)

(二十三分)

(此処に居れば…)

(安心の筈だし、)

(ふう…)

可未兎の安易な考えは自分自身の未来を残念な方向に変えた。

残り二十二分

鬼ごっこ《中》（前書き）

アクセス300超えました♪

これからもお願いします

鬼ごっこ《中》

可未兔は携帯を睨んでいた。

（こつこつ時の時間は）

（遅く感じるな）

「陸々さ〜ん」

ビクツと体を震わせて携帯を仕舞いながら可未兔は周りを見る。
下にも上にも居ない。

（…？）

（何処に居るのか）

「陸々さ〜ん」

顔を横に向けると、

隣の図書室から頭が出ていた。

記憶に全く残っていない顔が此方に向いてあった。

（！？）

「陸々さ〜ん、下りなよ〜。危ないよお？」

やけに間延びしている声を聞いた可未兔は、
背筋が凍った。

「今そつちに行くねえ」

処刑宣告。

（これは）

（鬼ごっこは）

（ゲームですね？）

（何で…？）

可未兎は体を起こすと、

飛んだ。

下には

土色の地面しかない。

男子は此方に向かっていた。

窓の所まで行った時、

前に何か落ちた。

男子は下を見た。

そこには――

何も無かった。

「どっ何処に行ったんだ！？」

叫んだ所で、

可未兎の姿をその瞳に捕らえられなかった。

『現在は、十三分だよん♪残りの人数聞きたい！？聞きたい！？仕方がないにゃー残りの人数は〓十五名（　　）沢山男子に捕まっただけど他の女子は頑張ってにゃあ』

色とりどりの画面を見つめているのは――

可未兔。

暗い所に独り居た。

（運が良かった）

（死ぬかと思いました）（まあ賭けですし）

（負けたら死あるのみ）

（でしたね）

（まあ）

（鬼ごっこで死んだら恥ずかしくてお墓から出ますけど）

可未兔がした行動は簡単なモノだった。

単純に下の階に有る『科学階段教室』に窓からダイナミックに突入しただけだ。

そう、

した“だけ”。

そして、知る人ぞ知る科学階段教室の秘密の場所。

床と階段の間に有る少しの場所。

侵入方法は一番前の席の床に有る板を外す事。

（とりあえず、）

（安心ですね）

そう、安心の筈だった。

ゴトッ

と板が外れる音がした。

「!?!」

入ってきた人物は――

鬼ごっこ《後》

奈留茂は後ろを見た。

大半の女子は捕まっているので、人数は減っていた。

奈留茂の後ろにいる女子を狙う男子が追って、捕まえて…

の繰り返しで何時のまにか大半の女子が消えてるという事。

（良かった…）

（でも何でまだ）

（追ってくるの…！？）

「…なっはっはっはっ…なっなる…奈留茂君…まっ待って…ま…て

…」

もはや屍が走ってるような状態の女子。

（そんなに疲れてるなら諦めて逃げろや！）

「ひゃっ」

短い悲鳴が聞こえる。

後ろを見る。

どうやらまた一人捕まったみたいだ。

向かいあっていた。

男子は頭を掻いた。

女子は頭を傾げ、眉を潜めた。

「…？」

「好きなんだよ！」

（何でこんな時に告白してるのー！）
思わず心の中で叫ぶ奈留茂。

「馬鹿。んな事言われたら照れちゃうじゃない…」

「俺と付き合ってくれねえか…？」

「私…奈留茂君の事考えちゃうかもしれないけど…それでも良いの？」

「勿論さ！」

男子はパアツと顔を輝かせて女子を抱擁した。
遠ざかって行くカップルの冷たい瞳で見てから奈留茂は前を向いた。

（何か悲しくなった…）

スピードが上がっていく。

後ろにいる女子達の距離が離れていく。

そして、二十分かけてやっと奈留茂は振り切ったのだった。

（また追われるのは御免だし、）

（とっておきの場所にも行きますか…）

奈留茂は軽い足取りである場所に向かった。

（隅にでも…）

唯一の入口を視界に入れときながらゆっくり移動する。

「んっ？」

相手も誰か居るのが気付いたのか馬鹿そうな声を出した。

（バレた！？）

息を呑む可未兎。

「誰か居るのかー？」

低い声を発した男？はしゃがんで板で閉めた。

（こんな馬鹿な声聞いた事ある気が…）

「おっ！ラッキーだ！」

男は駆け寄る。

「誰…？」

「誰って俺の名前忘れたか？奈留茂だよ」

（忘れたくなつた）

奈留茂と分かった可未兎は顔を歪ませた。

「触らないで下さい」

「何故！？」

「静かにして下さい。バレたらどう責任取ってくれるんですか？」

「何か扱いがひでえ！」

「シッ…」

人差し指を唇の前に置く。

「何で触っちゃなんねんだよ…?」

奈留茂は小さな声で聞く。

「分らないんですか?」

「まさか…俺のキスが嫌か?」

「それもあります」

「まちですか…ってえっ?それ“も”?」

「はい。本命は」

「本命!? お前好きな奴居たのか!? どいつだ!？」

「…妄想が激しい人ですね。意味が違います」

「…いみ?」

「はい。私の本命、つまり目的はノートです」

「はっ?」

奈留茂はもう一回言ってくれという事を頼む。

「ノートです。五百円です」

「ノート…すかつ…」

奈留茂は横に倒れた。

「…どうかなさいましたか？」

「はっ」

「はっ？」

「ハハハハハハ！」

いきなり爆笑する奈留茂に可未兎は…

「…」

ドン引きだった。

「静かにして下さい」

「でもさあ…」

奈留茂は笑いを止める。

「でも？」

可未兎はいきなりの逆接に戸惑いを感じる。

「それって俺に得無いよねえ？」

「…知りませんよ」

「それって何週間分のお願い？」

「はいっ？」

「何週間分のお願い？」

繰り返し言われたら言葉を更に頭にリピートさせて、

「二週間？」

クエスチョンマークを付けて答えた。

「了解」

何故か奈留茂は満足そうに頷くと可未兎の隣に座る。

勿論触らない距離で。

その時、

二人のケータイが光った。

二人はメールボックスを開く。

『後三分だよっ 因みに捕まってない人は一人だけだぞ 誰だと思っ？誰だと思っ？しょうがないなあ。正解は、陸々さん』
陸々さん頑張ってねえ』

すぐに電源ボタンを押す。

画面が待ち受け画面に切り替わる。

「凄いな。お前」

「何で独り…」

「仕方がないよ。だって可未兔がさあ、」

奈留茂は立ち上がり、板を外した。

「完璧すぎなんだよ」

奈留茂はニコツと笑うと外に出た。

「…？」

「一緒に出たら怪しまれるだろーし、もう女子は居ないし」じゃあなっ」

奈留茂は手を振って、

可未兔の視界から消えた。

ゴトツ

と閉じる音がした。

「…独りか」

可未兔は頭を抱えた。

（独り？）

（独り？）

（ヤダ）

（イヤ）

（イヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤ…）

頭をブンブン横に振る。

携帯で時間を見る。

「早く…終わってよ…」

（あの笑顔に慣れたら…）

（私は…）

可未兔は自分の体を抱いた。

携帯が光る。

可未兔が求めていた光。

可未兔は素早くメールを確かめる。

『陸々さんおめでとう！男子はもう全員体育館だから来て！』ご褒美が待ってるよお♪』

可未兔は携帯をポケットに仕舞い、暗闇から出た。

そして走って体育館に向かった。

鬼ごっこが終わった後の物語（前書き）

色々話が進みすぎました…

すいません

鬼ごっこが終わった後の物語

「ハ―イ、リクリクさ―ん！ホォーユ―」

明るい笑みを浮かべたジョーダン先生。

「…陸々（ろくろく）です」

可未兔は苦笑いした。

「ドンマイデース！」

「先生が言わないで下さい」

冷たく言い放つ可未兔にジョーダン先生は、

「ドエスとユーモノですか！？」

変な質問をした。

「…賞品は？」

「オオッ！ワスレてましたー！」

テクテク何処かに行ってまたテクテク帰ってきた。

「オメデト〜ゴジャイマシユ！」

「…ありがとうございます」

ジョーダン先生から受け取ったノートを大切そうに握ると可未兎はペコッと御辞儀。

「ドーイタシマシテよ！ イッパイベンキョーしてね！」

「…了解しました」

「さてトゥデーはカイサンです！ エブリワンはロクリクさんにハクシュを！」

パチパチと軽く拍手が体育館に響く。

可未兎は気だるそうに頭を下げると着替えに教室に走った。

放課後―

肩をトントントンと叩かれる。

可未兎は振り向いたら、

「かーみと」

後ろからの声と同時に頬に何か感触がした。

そう、可未兎の頬に奈留茂の指が食い込んでいる。

「…小学生ですか？ 頭大丈夫ですか？ 脳内外科紹介致しましょうか？」

可未兎は冷めた目で奈留茂を睨むと淡々と話す。

「可未兎は相変わらず冷たいな」

まるで喜ばしい事だと云う様子の奈留茂に可未兎は溜息を吐いてから、

走った。

勿論、

猛ダツシュ。

「速っ!？」

奈留茂の聲がこのまま聞こえない事を願って学校を後にした。しっかりと鞆にはノートを大切に保管して。

「ハアハア…もう居ない…よ…ねっ？」

河原に到着した膝に手を当ててた可未兎は後ろを振り返った。

「うおおおおおおお!」

叫んでいる人影が近付いてくる。

(…違いますよね?)

(違いますよね?)

人影は可未兎の隣に着くと急ブレーキ。

可未兎の願い虚しくその人影は—

奈留茂だった。

「ふう…良い汗かいた」

「…部活は？」

可未兔は奈留茂が学校に用があるから戻るといふ展開を望んだ。
だが、世界は漫画のようにはいかないものです。

「引退だけど？」

奈留茂の言葉に可未兔は立ち眩みがしそうだった。

（てことは…）

（毎日来るって言う展開は無いですよ？）

（漫画じゃないんですから）

「明日とかは用事がありますよね？」

「何で？」

不思議そうに頭を傾げた奈留茂に可未兔は、

「ありますよね？」

強調した言葉を投げつけた。

「無いよ？」

「…」

「どうしたー？」

（何でー！？）

（で、でも私の所に来る訳無いですし、）

（だって大丈夫な筈だー）

「毎日一緒に帰れるな！」

親指を立てて言う奈留茂。

（少女漫画ですかー！ー！ー！）

（読んだ事ないけど漫画ですか！？漫画ですか！？）

可未兔の心の絶叫が聞こえる訳がないので奈留茂は当たり前のように可未兔の手を取って河原に行く。

「さあて、まずはっと」

仲良く並んで座ったら、
奈留茂は可未兔の頬に、

自分の唇を押し当てた。

「！？」

可未兔は驚いて思わず立ち上がる。

「どうした？」

可未兔の行動に驚く奈留茂。可未兔の顔は無表情だが、やはり強張っていた。

「…何やってるんですか？」

出来るだけ声を落ち着かせる。

「キスだけど？」

当たり前のような顔で答える奈留茂。

「何でいきなり…きつキスをしたんですか？」

「だって考えてみるよ。俺はお前を捕まえたらキス出来たんだよ？
だったら良いじゃねえか」

減るもんじゃねえし。言葉を付け足してニヤツと笑う奈留茂。

「…知りませんよ…。てか嫌ですよ」

可未兎はキスされた頬をさする。

「貴方のせいでファンクラブの人に目をつけられたくありません」

「んな事させねえよ？だって俺、」

精一杯間を置いて、

「お前の事好きになっちまったみてえだし」

告白した。

「はっ？」

可未兔は混乱する。

（脳が情報処理を拒否）

（何を言いたいのかわかりません）

「『はっ』は無いでしょ？こつち真面目に告ったのに」

プーと頬を膨らまして、

プツと息を吐いた。

「すっ好き？あつ貴方あつたま平気ですか？」

「悪いか？」

（こつこの人、）

（頭大丈夫？）

（私のせいで）

（犠牲になった人は沢山居るんだよ？）

（中には…死んだ人も）

「…駄目」

「…本気でか？」

「駄目」

「真面目に？」

「駄目？」

「本当の本当に？」

「駄目…」

可未兎が俯いて言った言葉に奈留茂は、
クッソオと
笑った。

「…どうして？」

「どうしてって？」

「何で…笑えるの？」

「んな事分かりきってるだろ？」

奈留茂は寝っ転がった。

「笑わなきゃ心が折れちまいそーだから」

「…ごめんなさい」

「じゃあさ、俺の二週間分のお願い」

沈む太陽によって奈留茂の端正な顔が真っ赤に染まる。

「…何？」

対して可未兎は血色悪いような真っ白だった。
太陽によって少しは赤く染まってはいるが、
顔は心なしか白い。

「名前で読んでくれよ。淚香和さん、じゃなくて『奈留茂』って」

「それだけでいいですか？」

「うん」

満足そうに頷く奈留茂を可未兎は見ると、口を動かした。

「なっ 奈留茂さん……」

「何か新鮮だな」

「……でっでは帰らせて頂きます。さようなら」

「バイバイ」

二人は別れた。

だが、二人の運命は別れなかった。

複雑に絡まった糸はそう簡単には解けない（ほどけない）のだから。

―女の戦いの火蓋―（前書き）

何か…眠いです。

おやすみなさいです…

―女の戦いの火蓋―

―次の日―

そろそろ6月に近付いた暑い5月29日である。

（暑い…）

（まだ5月ですよ…）

（でも、）

（何か寒い）

（何か）

教室で何時も通りの朝読書。

だが、朝読書は“以前”の時の何時も通り。
今は違う。

いや、今では無く前日までは違かった。

昨日から可末兎の気持ちは変なモノだった。

（何も無い）

（何も無い何も無い）

（忘れなきゃ忘れなきゃ）

（うがー…）

全くページが進まない苛立ちが募る。

（集中集中）

いざ読書、と思ってページを進めようとした時、

「陸々さん、少し良いかしら？」

霰が話しかけてきた。

「…何ですか？」

顔を少しひきつらせて、静かに聞いた。

「貴方、奈留茂君に何かした？」

「したって…私限定なんですか？他にも聞くべき人は居ないんですか？」

「当たり前でしょ？貴方は奈留茂君に近付いた可能性がある女なんだから」

仁王立ちの霰を見て可未兎は、

（女って、）

（自分も女じゃないですか）

（っーか、）

（今から読書に入るんで邪魔ですけど？）
心の中で喧嘩を売っていた。

「そーなんですか。で、他に用件は？」

「…」

「無いですか？では私は読書したいので」

可未兎は霰から視点を紙の中で踊っている文字に移した。

「貴方、異常よ」

「いきなりどうしたんですか？」

霰に視点を戻しもせず、静かに言った。

「女ならそんな事しないわ。なのに、」

「そんな事って？異常って？普通って？女って？男って？、それって何ですか？」

単調な声を紡ぐ薄い唇はゆっくり動く。
ゆっくりと、ゆっくりと。

「…普通は平均の人の事ですよ」

「フーン？なる程。素晴らしい知識を教えて下さりありがとうございます。貴方がどおゆー風に考えても構いません。自由権ですからね。ですが、一樣貴方が言う普通の事を言いますと私は女です。肉体的には確実に。中身は知りません。私の考えでは中身に性別は有りませんから」

今度はスラスラ応える。

「私に文句でも有るのかしら」

「ありません。ですが、貴方と私の思想は相反する事は確実です」
ボタンと本を閉じ、霰に視点を再度移した。

「ですが、思想が違ってもどうか宜しくお願いします」

深々と御辞儀をする。

「…私は貴方の行動をしつかり見ときますから、覚悟して下さい」

「覚悟？何かするんですか？」

可未兔は本しまう。

可未兔の細い指先が霰の頬に触れた。

「どうか穏便に」

ニコリともせず無表情に事を告げて可未兔は立ち上がった。

「逃げるつもり？」

「御手洗です。後七分有りますから」

「絶対証拠を見つけますから」

振り返って可未兔の背中に投げかけた言葉を可未兔は、

「何の事がさっぱりですけど？」

受け止めなかった。

（女とは何？）

歩き出した可未兔の疑問。

霰と可未兔は複雑に絡まっていくのであった。

—監視されて—（前書き）

何か…

余り話が進まない。

かもっ？

――監視されて――

その後の授業中とか五分休みなどでは奈留茂ファンによって監視が始まったらしい。

数メートル後ろにはどっかのクラスの子がいる。

「キモチワルイですね…」

御手洗とかでは外で待っていたり…。
可未兎にはこの上なく最悪だった。

「…」

バツと後ろを振り返る。

ビクツと三人の女子達が肩を震わせた。

「何ですか？ ストーカーですか？」

三人は顔を見合わせると、

「龍巻さんからの命令だし」

「奈留茂君に近付かせないし」

「つつかアンタウザいし」

どっかのアニメのようなコメントをした。

「私はプライバシーの保護を求めます。もしくは自由権を」

「意味わかんないし」

「知らないし」

「つつかあたし達がいっぱいバシーぶっ壊したし？」

(…)

(何で語尾が毎回“し”なんだろう?)

「キモチワルイんです。私にはこの上なく。集団行動自体余り好きじゃないんです」

そして、可未兎は足を素早く動かした。

「「逃げんないいいいいー!!!!」」

三人は絶叫と共に可未兎を追う。

「五分休みを無駄にさせないで下さい！後授業は英語だけなんですから！」

可未兎は教室に向かった。

そんな姿を見た霰はクスクスと教室から覗いていた。

「（奈留茂君に近付かなきゃ良かったのにね？）」
その笑みを見ていた男子は後にこう語った。

『hurricane smile』
ハリケーンスマイル

そして遊び半分に付け足した伝説は――

『あの笑顔で笑いかけられた奴は何かが壊され血舞う（こわされちまう）。』

この伝説は後に現実になってしまう。

「……」

奈留茂は教室（C組）で頬杖をして静かに自分の席に腰掛けていた。
そんな奈留茂の周りには――
女子の大群がズラリと。

「ねえ」

「……何でしょうか？ 奈留茂君！」「……」

見事なハモリに感動もせず奈留茂は、

「離れてくれないかな？ 暑苦しい」

冷たい言葉を贈った。

「……いやああああん♪ 奈留茂君の照れ屋ああ♪」「……」

そんな言葉でさえ喜んでいる女子を一瞥した奈留茂は――

「気持ち悪いって言う言葉知ってる？」

唇を余り動かさずにスラスラ言葉を出した。

「おお奈留茂。また女子が沢山居るなあ」

「流石人気者」

奈留茂のクラスメートが楽しそうな瞳で奈留茂を見ていた。

「欲しいならやるよ」

「…どうした奈留茂？」

「何時もなら『疲れちまうよ？』までこれは『』とか明るく…」

少し慌てふためくクラスメートに奈留茂は睨み付ける。

「別に。もう疲れたんだ」

「…そうか」

「邪魔して悪かったな…」

とぼつちりを受けた様に顔を歪まして男子達は自分の席に戻った。

（可未兎…）

（可未兎に会いてえ…）

最後の授業ではペン先は全く動かない奈留茂の頭は、

一人の少女で一杯だった。

鎖など、要らない（前書き）

何か今回は長いです。

ご覧の方、

飽きないように…お願いします。

鎖など、要らない

学校が終わって…取りあえず今日の監視は無くなった。

（多分、あの人達は―）

（私達が会った場所が河原だった事）

（知らないんだろうな）

“し” 連呼姉妹は部活に向かったみたいだし、
安心して帰ろう。

可未兎は下駄箱から軽い足取りで家に向かった。

道が二手に分かれている。

一つは、真っ直ぐ家へ。

もう一つは遠回りだけど落ち着ける場所がある。

（どっちに行こう？）

（河原？家？）

可未兎は今日出された宿題の量を数える。（数学の二次関数は別に
授業中に出来るし―）

（英語は十分で終わる）

（理科は出されてない気がするし―）

（河原に行きますか）

四時でも高い位置で輝いている太陽を一瞬瞳に映して―
可未兎は河原にスキップしながら向かった。

「来ないでくれないかな？」

教室でのんびり帰りの準備を済ませた奈留茂の冷たい言葉が向かう先には二人の女子が居た。

「今日のー監視役は私なんですー。我慢して下さいー」

長い髪を弄んで（もてあそんで）間延びした言葉を発する女子に奈留茂を感じた事は一つ。

（ウザい）

「ただって…奈留茂さんが…陸々さんって人と関わったから…いけないのは…奈留茂さんですう…」

対して、

二つ結びの俯いた女子は途切れ途切れに言葉を紡ぐ。
奈留茂を感じた感想は―

（ちゃんと話してくれよ）

「何で君達に俺の自由を奪われなきゃなんねえんだよ？俺の自由だ」

可未兎の様に語調を強めに言う奈留茂を見た二人は―

「奈留茂君にはそんなモノ、なーいよっ？」

「奈留茂さんは…分かってませんよ…」

笑っていた。

「奈留茂君は、本当に良い子だねー。アイドルみたい」

「そんなアイドルを一人の…女子に…渡したい…なんて思う女子は…居ません」

「あのねー奈留茂君。私達は奈留茂君にはなーんも悪い事はしないよ?」

挑発的な言葉は奈留茂にのしかかる。

（なんだ?）

（嫌な感じがする…）

「私達がする事は単純です…。ただ—」

次の二人の言葉に奈留茂は、絶句した。
何も言葉を紡げなかった。

「その女子を消すだけだよ（です）」

まるで花が散るような—

まるで何かが壊れた様な美しい笑顔を奈留茂に、
向けた。

残酷な笑顔と言葉。

奈留茂の手からスルツと鞆が落ちる。

パカンッ

鞆の中身がパラパラと音をたてて散らばる。

「あー奈留茂君鞆落としちゃってー。どうしたのー？」

「大丈夫です？」

奈留茂は口をポカンとただ開くだけだった。

「奈留茂君ー？」

中身を全て中にしまった女子は鞆を奈留茂君の前に差し出した。

「…？どうしたんです…？」

奈留茂の状態に異変を感じた二人はただ顔を見合わせるだけだった。
そう、

二人には罪悪感など無いのだから。

「お前ら…」

「「？」」

奈留茂はややあつてから言葉を出す。

「…何も違和感無いのか？」

「違和感ー？」

「何についてです…？」

頭を傾げる二人を見てー

奈留茂は分かった。

（自分の欲望に…）

（忠実なんだ…）

それがどれほどの威力があるかはまだ奈留茂には分からない。

『自分の欲望の為』という知りたくもない文など―。

だが、まだ自分の欲望の方が良いと思う時が来るとは今の奈留茂には知るよしもない。

河原に着いた可未兎は空を仰いだ。

（ああ…）

（こんな時間でも、）

（真っ青な空）

（どうやったらそんなに―）

（変わらずにいれるの？）

「な…るも…」

口から自然と忘れたい単語が出てくる。
とっさに可未兎は口を塞ぐ。

（馬鹿だなあ…）

（私の存在を一瞬認められた位で、）

（はしゃいじゃって）

「ハアハア…」

「？」

荒い息の音が可未兔の耳にこびり付く。

（まっ 関係無い人だよね）

背後を見ずに空を仰いでいた可未兔に――

望んでいるの声か、はたまた望んでいない声なのか――
可未兔の耳に届いた。

「ハア……可未兔？」

後ろを振り返ると――

奈留茂が居た。

奈留茂はその後――

走った。

こんな腐った鎖に動く事を禁じられるなんて――
奈留茂には考えられないモノだった。

奈留茂は鞆を受け取った後、
風の如く走り去った。

後ろからなんか甲高い声がしたが――
今の奈留茂にはどうでもいいモノだ。

奈留茂の足は吸い込まれる様に――

河原に向かった。

出逢った場所は大切な記憶（前書き）

ちょっと遅かったですね。

すいません。

読んでくれたら嬉しいです！（――）

出逢った場所は大切な記憶

奈留茂の頭の中を支配していた少女が空を仰いでいる。

（こっちは気付いていないのか？）

（でも…）

（また会えたんだ）

（また、会えたんだ）

「ハア…可未兔？」

震える体を抑えて、
少女の名を呼んだ。

そして、目の前にいる少女が、

振り返った。

「淚香和…な…るも？」

たどたどしく奈留茂の名を呼ぶ。

“名”を。

「可未兔…」

奈留茂の口は可未兔を呼ぶ事しか出来なかった。
少しずつ可未兔の元に向かう。

「どうしたん…ですか…？」

頬をほんのり赤く染めて、以前のような強い語調ではない話し方を
する少女。

それが、奈留茂の心を更に揺さぶる。

「可未兔…」

「…？陸々可未兔ですが…？頭…大丈夫です…か？」

「可未兔っ！」

奈留茂は、可未兔に

抱きついた。

「ちょっとちょっとどうしたんですか！？私何かしましちゃうっふにや
っ！？」

奈留茂の力が強すぎて、可未兔は草に転がった。

「やっと…やっと会えた！」

「…？」

「ほんの少しでも会えなくて…寂しかったんだ…」

直球の言葉が可未兔を貫いた。

（ばっかみたい…）

（他の生物を求めるなんて）

（本当に…）

（馬鹿なんだなあ…）

「るい…なるもさん」

「何？」

「…暑いです」

「他人との温もりは大切だよ」

「貴方…馬鹿ですか…？」

「んっ？」

「温もりは一瞬ですよ。私はそうゆうのを“麻薬”だと思います」

「麻薬う？」

抱きついたままの奈留茂は幸せそうな声で回答する。

「…もしこれを感じたら、また求めるでしょう？また離れたら、また恋しくなつて。そして最終的には温もりは―消える。まるで麻薬じゃないですか」

「麻薬ねえ…」

ゆっくりと目を開く奈留茂。

やがて自分の体を起こしてから可未兎に向かって手を差し出す。

「それはお前の考えだろ？んな暗い考え捨てちまえ！楽しむ事が大切なんだよ！」

顔をクシャツとしわくちやにする目の前の男の手を可未兎は、

払った。

「貴方は…私の考えや思想を変えてはいけない」「変えるのは俺じやねえ。んな事出来る訳無いよ」

プクツと子供の様に頬を膨らませる。

「では…誰が変えるんです？」

「フツー分かるだろ！？お前だよ！お前！」

「わた…し？」

「そーだよ。他人が何かやって変わるなんてねーよ。コレ俺の持論な」

「どうやって？」

「分かんないのかー？」

だったら、と言葉を付け加えると可未兎の腕を掴んで、

「俺が教えてやるよ！」

起き上がらせた。

「
…」

体を起こされた可未兔は頭を傾げて奈留茂を見た。

「大変ですよ？」

無表情で口を動かした。

「上等だ！俺がお前に色んな事を教えてやる。だからお前も、
すうっと息を吸って、」

奈留茂は叫んだ。

「俺に沢山教えてくれよ！」

可未兔は、はあっと息を吐いて、

「出来ますかね？」

腕を組んだ。

「頼むぜ、相棒」

「嫌ですよ、変人変態星人さん」

そして、

奈留茂は豪快に笑って、

可未兎はクスツと小さく息を吐いた。

出逢いの後の祭り（前書き）

遅くなりました…。

すいません…

読んで下さると嬉しいですー。

出逢いの後の祭り

二、三日ぶりの再会を互い（？）に感動してさあ帰ろうと一歩踏み出した時、

「陸々さんー？」

「何故…貴方が…」

頭上に声がする。

「奈留茂君から離れてー」

「離れなさい…」

につこり笑っている二人の少女の瞳は、

可未兔をしっかりと見据えていた。

「貴方達に命令される覚えはありませんし、この…奈留茂（人）…、
とは何もー」

「黙って」

可未兔の言葉は冷たい言葉によって消える。

「奈留茂くん？その女に言つてよ。『死ね』って。『消えろ』って。『俺の前に現れるな』とか」

「その女の心を壊して…」

「じゃないと、…」

「その女を、」

二人は唇を同じように動かした。

「私達が壊してやるよ?」

奈留茂は二人の一つ一つの動作を見つけて、

動かない。

動けない。

（凄い）

（馬鹿）

（私を簡単に壊せるとでも、）

（思ってるの?）

（てか、）

（凄いなあ）

（ハモリ具合が）

可未兎のおかしな思考を読み取れる訳もなく二人は唇を小刻みに動かしている。

「…聞ってるの…?」

（今日の晩御飯のおかずは魚にでも―）

「陸々さんー?」

遠い空の彼方に想いを馳せていた可未兎は二人の言葉に耳を傾けて

いる筈も無い為、
可未兎の反応は、

「何ですか？」

頭を傾けもせず、視線を二人に移しもせず、
ゆっくりと薄い唇を上下左右に動かすだけだった。

「可未兎…」

よくもまあこんな状態の時に…と奈留茂は瞳のメッセージを送る。

「どうしたんですか？」

可未兎は相変わらず唇を動かすのみだった。

「霰さんに言います！」

「覚悟…しなさい…」

ゴミの様に可未兎を見る二人に可未兎はぼそりと呟いた。

「悪役の定番コメント」

「何か言った!？」

「あんた…!」

「気にしないで下さい。只の余興的なノリのコメントです。あつ、
私『イジメ』っていう馬鹿げた事嫌いですので、穏便に」

「黙れ！」

「後悔させてやる…！」

二人は重い足取りで学校に帰った。

「なあ可未兔」

「はいっ？」

「大丈夫か？」

「あの方々ですか？さあ…私には関係ない方々ですので」

「いやいや、お前だよ！？」

「大丈夫ですよ。壊れるなんて不可能ですから」

視線を地面に向けた可未兔は軽い足取りで家に向かう。

「…根拠は？」

「根拠ですか？分からないんですか？」

以前動かない奈留茂を見て、

「最初から壊れてるから」

可未兔は無表情で、
言葉をさも当たり前のように呟いた。

「…壊れてる？何処がだよ…」

奈留茂は無理矢理口を笑わせる。

本人は気付かない。

自分の引きつった笑みを。

「…分からないんですか？本当に？」

まるで一＋一の答えが分からないの？と聞いている様な瞳。
そして彼女は、
彼女にとっての一＋一の答えを教えた。

「全て」

風が靡いた。

雲が静かに、ゆっくり流れていく。

「全て。私の顔、私の声、私の肉体、私の行動、私の精神、そして
――」

「違う！」

最後の言葉を言おうとした可未兔の口を奈留茂は急いで塞いだ。
奈留茂は言わせたくなかった。
何故か分かってしまった答えを。

「違う…。可未兔…可未兔は…違う…」

可未兎は俯く奈留茂を見つめる。

何故？と訊いてくる可未兎の目を、

奈留茂は見れなかった。

可未兎は静かに奈留茂の手を払った。

「変な方ですね。この私の存在を否定もせず、認めもせず。中途半端はいけませんよ？」

「認めもせずって…！認めているよ！」

「『認めているよ』？面白い冗談ですね。認めているなら貴方は何故私の言葉を遮ったのです？認めているなら最後まで言わせて下さい」

「何で…」

そんな悲しい事をすら言うんだ。

それを伝えるべく、

奈留茂は顔を上げた。

可未兎の顔を見る。

その顔が映している感情を視た。

映っている感情は――

「絶望、ですか？私を視て絶望しましたか？」

感情を言葉に出来ない。

したい―したい―表したい―表して―その顔を幸せそうな笑顔にしたい―。

（何で…言葉が出ない！？）

「安心して下さい。明日から私から離れれば貴方の周り“は”静かになります。では―」

ご武運を。

可未兔は奈留茂の腕から離れて、背を向けた。

俯く奈留茂の顔を見ずに、

可未兔は帰った。

「…可未兔…」

奈留茂が呟いた言葉を聞いてくれる人は居なかった。

雲は闇のように人々の心を覆った。

（これでアノ馬鹿の身は安全）

（これで良いんだ）

重い足取りの可未兔の顔は暗く、曇っていた。

「…奈留茂…」

可未兔の呟きも聞いてくれる人は居なかった。

ファンクラブの尋問？（前書き）

この頃4日ごとに投稿してるな！。

ファンクラブの尋問？

――朝――

可未兎は昨日何も無かった様に登校しようとした。

何も変わらなかったかの様に。

しかし、本人は気付いていない。

その足取りは昨日よりも重い事を。

「『陸々さーーん』オハヨー？」「」

校門に奈留茂ファンクラブがずらりと商品の様に並んでいた。

登校しているありきたりな生徒達は目を合わせないように離れて校門を突破している。

「陸々さん。話はこの二人からしつかりと聴かせて頂きました」

霰が一步前に足を出して腕を組んで可未兎に微笑みかける。

「話？何のですか？」

対して可未兎は無表情でそれに応える。

「あら、失礼な方ですね？もう忘れてしまったんですか？」

「何を？」

「ふう…奈留茂に手を出したわよね？」

「手を出す？手を出すとは？」

「本当にお馬鹿さんなのね？」

可未兎は頭に自分の指を乗せる。

「学力テストや定期テスト、実力テスト総合一位を毎回取ってる“生き物”に負けている方は馬鹿では無いんですかー？」

ユーモアな話し方をする可未兎に、

「関係ないわ」

ピシヤリと冷たく返した。

「では、馬鹿とはどうゆうお馬鹿さんなのですか？」

可未兎は鞆をあさってメモ帳とペンを取り出す。

「常識知らずの奴」

「常識知らずの方を馬鹿だと思っ馬鹿一名っ」と

ペンをすらすらっと紙の上に滑らせる。

「馬鹿一名って？」

こめかみに血管が浮かびそうな様子の霰を見もせず可未兎はペンを滑らせる。

「聞こえてるの!？」

「貴方ですよ？」

その可未兔の言葉によって、

校門付近の時間が止まった。

皆がピクリとも動かなくなった。

因みに、皆というカテゴリは『一般生とファンクラブのメンバー』である。

「……(何言ったのコノ人ー!!)」

その時、

皆の心が一つになった。

勿論、

皆の心を一つにした偉人の様な素晴らしい方は気付いている筈も無かった。

「(コノ人分かってんのか!? 龍巻さんのせいで何人コノ学校を辞めた人間が居ると思ってるんだ!?)」

「(馬鹿なのかコノ人!? 学校中有名な龍巻さんに何て言葉を!?)」

「(御機嫌を悪くしたら私達に八つ当たりされるわ!!)」

皆の頭には様々な思いが巡っていたが、

動く事は居なかった。

何故なら、

見てしまったから。

「（多分、何かの漫画のラスボスとは、こんな顔をする奴も居るんだろうな）」

誰かが思った。

全ての人間の心を恐怖に陥れそんな顔は――

「面白い冗談ですね？では私の何処が馬鹿なのか懇切丁寧に教えて下さるかしら？」

妖艶な微笑みだった。

霰が薄い唇で上品な口調を話す事は――
更に皆が動けないようにする鎖なのだ。

「分からないんですか？」

可未兎はハアと息を吐いてからスウと息を吸って、

「まず一人では行動が出来ない臆病な所、人を見下したような態度、自分の力量を測れない所、他人任せな所、多人数で一人の人間を虐めるその腐った根性、そして――貴方の今の行動」

息を吸いもせず、

早口で伝えた。

「あら、貴方にも多々当てはまってるじゃない？」

霰は怒りで足を小刻みに揺らしている。

（貧乏ゆすりだ）

（貧乏なのか？）

可未兔は頭を搔いてから、

「そうですね。では、OKですか。教材で読書がしたいんです」

「意味が分からないわ。教材で読書って」

にこやかに笑う霰を見た一般生はぎこちない動きで横を通り過ぎていく。

「素晴らしいツツコミですね、と言われたいんですか？違いますよ、予習をしただけです。この頃数学とか難しくて追い付けないんですよ」

「流石、学年一位は勉強熱心ね？そんな事している暇有るの？」

「暇？暇なんか沢山有りますよ？」

「貴方、この学校から離れて」

霰は唐突に言葉を突き出した。

「嫌ですよ」

可未兔は頭を傾げてキツパリ告げた。

（金足りないし）

「何でかしら？奈留茂君が気になるの？」

「いや…的外れです」

（生活するのも大変な貧乏人に酷い事言っな！）

「じゃあ何よ？」

「…あのー答えても良いですけど…」

「何よ？」

可未兔は校舎の近くにある時計台を指差す。

「授業始まっちゃうんですけどー…」

行つて良いですかー？というような動作で霰に頼む。

「…また後で」

霰は可未兔に背を向けるとファンクラブと一緒に消えていった。

「いや…来ないで下さいよー…」

可未兔は苦笑いしながら教室に向かった。

監視は意味なしです。

味気ない、むしろ味わい的には最低で、つまらない授業から解放されたお昼の休み時間。

何時もは可未兔にとって有意義な時間だった。
だが、

今、現在、十二時二十九分頃は――

とても有意義だとは思えない。

何故なら目の前に――

居るからだ。

台風などを起こしている奴が。

その名は――

「龍巻さん、何ですかー？」

屋上でご飯をつつく可未兔の冷たすぎて逆に爽やかな視線は五人の集団のリーダーの霰に注がれていた。

「監視よ」

霰は可未兔の視線を毛程気にせず、ただゴミ屑のように見下していた。

「監視、ですか。ならー」

可未兎は手を挙げて、

「プライバシー保護を主張します」

主張した。

「貴方のプライバシーに何かした覚えは無いわ。私は奈留茂君の所に行くから、貴方達はコイツを見てて」

可未兎を睨み付けながら周りの女子に命令する霰はドアを押した。

「さよーならー」

何も気にしない様子で卵ふりかけをご飯にかけて、口に運んで「美味しい」と無表情で呟く可未兎。

霰は一瞬何か言おうと口を開いたが、すぐに閉じた。

「奈留茂君は今何してるかなー」

わざとらしく明るい声を出して去った霰の背中を見届けた可未兎は退屈そうにポロリと言葉を零した。

「キモイな」

「「「!」」」

周りに居た女子はビクツと体を震わせる。

「どうしたんですかー？」

「…貴方」

可未兔の間延びした口調に一人の女子が立ちはだかった。

「今何言ったか分かってるの？」

「今ですか？確か『どうしたんですかー？』ですよ」

「その前…！！」

拳を震わせる女子をちらりと見てから、

「『キモイ』ですか？」

ふりかけご飯に視線を移した。

「…こんのお！」

怒りで我を忘れたように叫びだしそうな女子を周りの女子が必死で抑えている状態を一瞥して、

「バツカみたい」

吐き捨てた。

「何がよー！！」

「…分からないんですか？仕方がないですね…」

吐息を漏らしてから女子の肩に手を置いて、

「人の事でキレるなんて有り得ない、という事です」

呆れたように睨んだ。

「貴方！龍巻さんがどれだけ偉いか分かってるの！？」

「くだらないグループの中で威張れる位」

「そんな訳無いでしょ！？龍巻さんは大手企業の社長令嬢よ！？」

「社長令嬢ですかー。凄いですね」

「そんな方が何でコノ学校に来たか分かってる！？」

「馬鹿だから？」

興味なさそうに低い声を出しながら可未兎はお弁当をしまう。

「違うわよ！！龍巻さんは奈留茂君の為にコノ学校に来た一途な方なの！」

可未兎はハアと溜息を吐いて、

「でっ？」

頭を捻った。

「…!？」

女子達は啞然、愕然とした。

「お金の圧力をかけるんですか？ いやいや、私には親が居ないんで別に関係ないですし、今の家には家賃が無いですし…。何か意味有るんですか？」

可未兔はふわあと欠伸を吐くと、
ゆっくり女子達の横を過ぎて、

「低レベル」

冷たく言葉を吐いた。

「…」

女子達は驚きのあまり口をパクパク上下に動かすだけだった。

ギィ…

扉が開く音がした時に、女子達は振り返ったが、
既に可未兔の姿は無かった。

可未兔は眠そうに歩むだけだった。
だって、

（あの人とは離れたんだから——）

（あの人は傷付かないんだ）

可未兎の心を気付く人は居るのだろうか。

奈留茂と霰の会談（前書き）

銀魂が面白いなあ…

スイマセン。

関係ないですねえ（・・）√

奈留茂と霰の会談

可未兔の監視から抜け出した霰は苛立っていた。

だが、『奈留茂に会いに行く』という行為はその苛立ちさえ無くす事が出来た。

そう、

出来“た”。

過去形なのだ。

何故か今、現在進行形で苛立っている。

(…何でよ?)

(何で奈留茂君は…!!)

霰の前には、

机の上で静かに寝ている奈留茂が居た。

「…何があつたの?」

静かに寝息を吐いている奈留茂は微動だにしていない。

「最初からです…」

「そんな訳無いでしょ!?!」

奇声に近い声を上げる霰に近く的女子は慌てふためく。

「……」
「……」
「……」
(機嫌を悪くしたら…私達はこの学校に居れるのかしら!?)
「……」

「説明して!!」

「はっはいっ!!」

ピシッと真っ直ぐに立ち上がり、硬直する女子達。

「どうしてかしら?」

ころりと優美な口調で話し始める霰に更に恐怖を覚えながら一人の女子が途切れ途切れに伝える。

「私達が…周りをかこつ、囲んだら…いきなり、たったたた…」

「たっ?」

「倒れて…良く分からないんですけど…声を、かけたんですけど…
反応して、くれなくて…すっす…すいません…」

震える女子の声は霰を少し苛立たせるが、
霰は少しも顔に出さなかった。

「ふーん? そうなんだあ? ありがとう」

霰はニコリと口を歪ませた。

だが、その目は全く笑っていない。

「ひいっ」

一人の女子の短い悲鳴によって他の女子も小声で話し始める。

「どうしたら良かったのかな…?」「私途中から来たから悪くないよね…?」「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」「私が悪いかな…?どうしよう…」「怖いよお…」

「静かにして」

ざわめいていた空気が一瞬で静かで息苦しい空気に変わる。

「そおねえ…貴方達」

「「「はっはいつ!」「」」

「出て」

息苦しい空気の中でも声を発した女子達の心意気は一瞬で無駄になる。

「「「はいつ?」「」」

聞き間違いを祈ってか、思わず聞き返す女子達を霰は一瞥して、

「出て」

絶対零度よりも冷たい瞳で睨んだ。

女子達はゆったりと重い足取りで教室から出た。

「奈留茂くーん?」

さつきとは打って変わってハートが付きそうな甘い声を奈留茂の耳元で放つ。

「どうしてえ、起きてくれないのお？」

奈留茂は動かない。

「奈留茂くうーん、ワタシイ何か悪い事したかなあー？」

ブリッコをし続ける霰に求めている声が微かに聴こえる。

「…よ」

「なにになにいゝ？何て言ったの」

キャツと一瞬喜んでから更に大きな声で叫ぶ。

「お前は何も罪悪感とかねえのかよ」

霰が求めていた声は――

冷たかった。

「さっきの奴らもお前らも俺を拘束して、見せ物にして。お前らは微塵も罪悪感はねえのかよ」

顔を上げた奈留茂の瞳は――

冷たい。

「人で楽しんでいる事に何も罪悪感はないのかよって聞いてんだよ」

「じゃあ…奈留茂が私の質問に納得する答を与えてくれたら応えてあげる」

霰は笑顔を崩さず、むしろ楽しそうに笑う。

「モノによる」

「第一問」

スウと息を吸って、

「何で私を見てくれないの？」

顔を近付けた。

「それは、お前が」

「第二問」

霰は奈留茂の声を遮る。

霰にとって愛しい筈の声を。

「おい応えてやろうと…」

「何で陸々さんなの？」

「可未兎は——」

「第三問」

「…」

奈留茂は退屈そうに頬杖をつく。

「何で……じゃ駄目なの？」

「はっ？何て言った？」

「何で私——龍巻霰じゃ駄目なの？」

「…それは」

奈留茂は重い筈の口を軽々しく開く。

「応えないで」

霰は——奈留茂の声をまたしても遮る。

「応えないで？なら何で聞くんだよ」

奈留茂はただただ霰の回答を待つ。

「奈留茂君が悪いんだ」

霰が唐突に、

予想範囲外の回答をした。

「はっ？」

奈留茂は啞然とする。

「何で…何で？私の何処が悪いの？陸々さんに負けない位可愛い顔、完璧なスタイル、陸々さんには無い地位、金、誇り。頭だってそこそこあるわ。なのに…何で？」

まるで、

何で貴方は一＋一の答が出せないの？

と聞くような自然な言葉。

「劣ってるよ」

奈留茂は霰の純粹で——汚い言葉を

打ち消す位強く言った。

「…何処が？」

「全部」

「何で？」

霰は愛しい人に抱き付いた。

同じ教室に居る傍観者気取りのクラスメートがオオと感嘆の声をあ

げた。

「何でって…分かんねえのか？」

奈留茂は霰の動きに驚いた様子も無く、

聞いた。

「分からないよ」

霰は悲しそうに言う。

「分からないから…奈留茂君が優しく、明るく、楽しそうな声で…教えて？」

霰はギュツと腕に力を入れた。

「馬鹿野郎」

奈留茂は霰を自分から離して、

「そーゆつのは自分で学習すんだよ。それ位やれよ」

霰を睨んだ。

「学習う…？私は奈留茂君に教えて欲しいな…？」

「い・や・だ」

奈留茂は霰を一瞥して、鞆から本を出して読み始めた。

「…さん？」

（そもそも何で奈留茂君がアノ女と関わっているの？）

（だって地味だし、クラスは一緒になったことは無い筈だし―）

「龍巻さん？」

「ほえっ？」

霰は頭を上げた。

何時の間にか周りにはさっきの女子達が居る。

「大丈夫ですか？何か…ブツブツ呟いてましたけど…」

「…声出してた？」

「はい…どうかしましたか？」

「いいえ…ありがとう」

霰はふうと溜息を吐いてから、「さあ」と言葉を放つ。

「陸々さん潰しの計画をたてるわよ」

付いて来いと言わんばかりに手を挙げる。

「…「はい！」」

ファンクラブの女子達の美しいハモリが学校中に響いた。

スタート（前書き）

何か携帯イジレたんで出来ましたー

いやぁ読んでくれてありがとうございます。

スタート

錆の臭いが鼻にこびり付く。

（ああ）

（嫌だな）

可未兎は床に転がる。

「可未兎お…」

男が可未兎に近付く。

「何…？」

可未兎は恐る恐る言葉を出した。

「来い」

ブルツと体が震えた。

鳥肌が立つのが分かる。

「どおしたあ…可未兎？」

（嫌…）

（助けて…）

（助けて…）

「可未兎お？」

一歩一歩確かめるようにゆっくり近付く。

小さな小さな足音は可未兔の頭では大きく響く。

「可未兔お…」

ついに、

目の前に。

手が可未兔に向かう。

（嫌…）

（助けてー！）

バツと体を可未兔は起こした。

「…夢か」

手を握る。

じんわりと汗が吹き出していた感触がある。

可未兔はスクツと立ち上がると布団をテキパキと片付けた。

朝の日課を終えた可未兎は重い足取りで学校に向かう。

（嫌な夢を見た…）

ハアと息を吐く。

校門には『風紀委員』と入ったバッジを付けた男の子と女の子が居た。

「おはようございます」

明るい挨拶に可未兎は頭を下げ、校門をくぐり抜ける。

気まぐれに頭を上げた。

清々しい空が視界の隅の隅まで入ってくる。

（今梅雨の時期なのに、）

（全然雨降らないなあ…）

そんな事を考えていると何時の間にか自分の教室に着いていた。
ドアを開ける。

ガラガラつと音が鳴る。

大して五月蠅くない物音の筈。

だが、

ざわめいていたクラスメートが静かになり、

此方をジッと凝視していた。

「…何か？」

取りあえず言葉を発すると皆慌てて会話をまた始める。

(…?)

(何か付いてるかな?)

まあ、良いかと頷いて自分の席に座った。

そして、

普通の日常が始まった。

だが、

心なしか、

静かだった。

誰も可未兔に話しかけない。

(いやあ、)

(静かで素晴らしい日だなあ。)

可未兔は心が弾んだ。

元々自分から話しかける内容など無いので普段は『何処宿題?』とか質問を女子達がしてくる位だった。

それが珍しく今日はない。

可未兔にとっては幸せ以外の何ものでもない。

(ああ…何て、)

(心地よいのだろう)

リラックスしていく可未兔。

対してクラスメートは体が少しずつ強張っていく。

そんな変化に気付く筈もなく可未兔は生活する。

そして、次の日も次の日も次の日も――

ずっと可未兔の幸せが続いた。

可未兔は気付かない。

コレがそこら辺の人にとっては『イジメ』と言つものだという事を。

先生達とはあるサイトを開いていた。
そのサイトは黒と赤で彩られていた。

サイトの名前は――

『学校裏サイト』

「先生…コレって…？」

中学一年生で御世話になっている教育実習生が嫌な汗を頬から垂らしながらジョーダン先生に聞いた。

「コノスクールにも…アツタンスネ…ガツカリです…」

カタコトな日本語を語る先生に突っ込む余裕も無い教育実習生はただマウスを上下左右に動かしていた。

「…先生、コレって誰でしょう？」

教育実習生は指差す。

「ドレドレ？」

そこには、

赤い文字で書いてあった。

『あの生意気な女を無視して下さい。』

『もし、話しかけたら、』

『貴方達も同罪です』

『分かりましたか？』

教育実習生はブルツと震えた。

ジョーダン先生は真面目な顔になるとポケットからメモ帳を取り出してスラスラ胸ポケットから出したペンを滑らせた。

「ユー、コレをケシテ。出来る？」

「いえ…僕そこまで技術無いんです…」

シユンと頭を下げて苦しそうに言う教育実習生。
ジョーダン先生はその頭に手を置いた。

「シカタがナイのー。コウチヨウのトコにゴーするノネ！」

「ジョーダン先生…」

「ホラ、スマイル」

「…ジョーダン先生！」

涙ぐむ後輩教師にジョーダン先生はコロコロ笑う。

「バカナノ？ソナンデソコマデ、オチコマなーい」

「…先生」

「ウイがストップするノネ。ソレで、スマイルするノネ！」

「…はい！」

「マズこのガールをトクテイとコノサイトをケスコトね！」

「はい！」

慌ただしく動くジョーダン先生達。

君達は止められる？

この腐った少女の妄想を？

止められる？

お昼休み（前書き）

今青森なう。

九時間車に乗って来ました。

疲れました（――□――）

そうそう、

お気に入り登録された方！！

ありがとうございます！！！！

お昼休み

今、現在お昼休み。

可未兎は初めて他人と昼御飯を共に食していた。
向かい合って食事を共にしている少女は――

霰だった。

「……」

お互い食事に夢中なのか、おかずを口に運んでいる。

教室で食事している他の中三は有り得ない組み合わせに目を点にしていた。

何故こうなったかというと、

十分前――

可未兎はお昼休みの始まりのチャイムが鳴った途端、鞆の中に全てのモノを詰めて屋上に向かおうとした。

「……さん」

（今日は大量に作ってみたジャガイモの味噌煮込み）

（美味しいかなあ♪）

（あれ形を崩さないようにするの大変だったんだよなあ♪）

「陸々さん！」

「…何ですか？」

無意識に声のトーンが低い可未兎。

『話しかけられる』という可未兎にとってのストレスが数日ぶりに来てしまったので――

その上、彼女にとって幸せな食事について考えていた時なので――

それはもう、御機嫌なめなのである。

「一緒に食事でも如何でしょうかと思って」

後ろには上品な笑みを浮かべた霰がバスケットを持っていた。

「…貴方はファンクラブの方と食べては如何でしょうか？」

「あら…何でかしら？」

霰は頬に手を添えて視線を右上に向け、頭を傾げる。

「嫌だからです」

率直な意見を述べた可未兎に霰は、

「良いじゃないですか。それともフアンクラブの子を十人位引き連れた方が良かった？」

「…良いですよ」

可未兎は渋々OKをすると霰は更に口角を上げ、「嬉しい」とわざとらしい声を出した。

そして可未兎の前の空いている席を移動させて向かい合わせる。

「…何で此処で食べなきゃなんないんですか？」

「だってえ…日差しが熱いんですもん。ほら、それにもう6月後半ですよ？紫外線がねえ？」

「…」

可未兎は嫌そうに顔をひきつらせて自分の席に座って食事を始めたのだった。

そして、

数分後には――

今の状態に。

「陸々さん…?」

「何ですか?」

バスケットから様々な品を取り出して口に運ぶ霰は可未兎の一つの料理を指差して、

「何ですかコレ…?」

顔を歪ませた。

「ジャガイモの味噌煮込みです」

「ジャガイモの味噌煮込み…?」

「ジャガイモは腹持ちが良いので、試しに。意外と美味しいですよ」

可未兎は特に気にした様子ではなく、黙々と食事続ける。

(…何か、)

(美味しくなくなるなあ…)

(コイツを見ていると…)

「…そうなの」

HAHAHAと不気味に笑って見せる霰を一瞥した可未兎は――

「頭大丈夫ですか?」

ジャガイモ味噌煮込みを口でモグモグさせながらさして興味なさそうに聞いた。

「…いや。別に平気ですよ？それは良いとして、」

バスケットの中から更に品を取り出しながら霰は言う。

「そろそろ演劇祭近いですねえ」

「そうですね」

「7月に行われる中学一年VS中学二年VS中学三年の演劇祭。楽しみですねえ？」

「そうですね」

まるで有名な芸能人の客席の反応の様な単調な声に霰は気にせず話を続ける。

「今回中学三年生の演劇の物語の執筆はD組らしいですね？」

「そうですね」

「陸々さんはどんな内容のを書くんです？」

「そうですね」

「…聞いてます？」

「そうですね」

「…」

霰は口を止める。

「そうですね？」

んっ？と頭を傾げている可未兎はお弁当箱をしまっ。

「何か感想は無いんです？」

「そうですね…」

「…」

「あっあれだ」

ポンと手を叩いて、
瞳に霰を映して、

「去年は体育祭だったのに何処かの金持ちさんが演劇祭が良いって
圧力かけたんでしたっけ？我が儘ですよねえ…？」

本を取り出した。

「あらっ？でもその金持ちさんは違うクラスに書かせるらしいです
けど？」

「ただ国語能力が無いため、他の人に書かせるんでしょう。だって
ジャンルは恋愛にしろって言われましたもの」

「ただ単純にそれが面白いからじゃないですか？」

「私は一番ミステリーが良いですけど」

「知らないわよ。でも楽しみねえ？」

「怠いですねえ？」

挑発するような口調に霰は怒りもせず、

ただ笑う。

「意見の相違ですねえ」

「ですね」

可未兎は本を開いてペラペラめくる。

「では…ごちそうさまでした」

ぺこりと頭を下げた霰は背を向けるとスタスタと足早に教室から去った。

「恋愛ねえ…」

可未兎は頬杖をついて空を眺めた。

真っ青な空は美しく輝いていた。

前兆

「演劇祭の奴を前に回しなさい」

疲れきった顔の先生に可未兔は軽く同情の視線を送った。

（そりゃ…）

（あんな問題児が居るとなあ）

後ろの子のレポートを貰った可未兔は自分を上にのせて前に回す。

「ハーイ！おツカレサマー！」

ジョーダン先生はニコニコ笑って可未兔達を見回した。

まるで誰かを探しているように。

（そんなキョロキョロ見て…）

（何か探しているのかな？）

それが勿論自分とは微塵も気付いてはいない。

「では… たつま…ではなく、先生達でどれかを選ぶんで楽しみにしてて下さい」

（今明らかに『龍巻さん』って言おうとしたな…）

（圧力がかかってるな！）

事務連絡を始めた先生から視線を外した可未兔は頼杖をついて空を眺めた。

ふわぁと欠伸を漏らした奈留茂は周りを見る。
十人位の女子達が挙動不審な動きをしている。

「どうしたの？」

怠そうな奈留茂の声にビクツと体を硬直させる女子達。

「…どうしたの？」

安心するようにニツコリ笑って見せる。

「どうしたの？」

だが、女子達を見据えているその瞳は笑っていない。

「うっうん…だっ大丈夫だよ…？」

一人の女子が歯切れの悪い言葉だけを返す。

「何が大丈夫なのかな？ねえ？まあ…別に教えてくれなくても構わないけどね？」

口では強制はしないと平然と言う奈留茂だが、
その瞳はやはり、
言えと言っていた。

「あっ…えっ…言って…良いのかな…？」

周りの女子に意見を求めるが、
周りの女子もオタオタしているだけで何も言わない。

奈留茂はスツと立ち上がると、
その女子に耳打ちする。

「一時間目始まっちゃうからさ…早く教えてくれない…？」

奈留茂の息が女子の耳にかかる。

女子はボフンツと音をたてると顔を火照らせる。

「駄目…かな…？」

「いっいえ…／＼／」

女子は小声で伝える。

「霰さんが…陸々さんに始めるそう…なんですう」

「…何を？」

「それは分かりませんけどお…何かやるって…」

「…ありがとう」

奈留茂は女子の頭に手を置いて優しく撫でる。

周りの女子達がキャアツ！と声をあげた。

撫でられている女子は幸せの極みをいったか如く硬直。

奈留茂はそんな事をお構いなしに自分の席について思考を張り巡らせる。

（何かを…する？）

（可未兔に…何を…）

「陸々さん」

凜とした声の主が可未兎の姓を呼ぶ。
可未兎を目線のみを声の主に向けた。

声の主は——霰だった。

「陸々さん、ファンクラブに入りませんか？」

霰の唐突の質問に可未兎は視線を空に映して、

「嫌ですーね」

眠たげな声で答えた。

「ふうん？じゃあ良いわ。私は貴方に——地獄を見せてあげる」

「地獄う…？ふわぁ…地獄なんてもう…見ましたよ…ふわぁ」

可未兎は口を手で覆って欠伸をする。

霰はクスリと微笑んだ。

「地獄を見た？私達がする事の方がきつと辛いでしょうけど」

（知らぬが仏って言うけど…）

（本当にそうなんだろーな）

（コイツらは）

「そうですかぁ…では…」

「お休みなさい」と手を振って頭を机に置いた。

「…ちよつと？まだ全て言い終わって…」

「すう…」

可未兎の可愛らしい規則正しい寝息が霰の言葉を遮る。

「…行きますか」

霰は可未兎を見下してから——ゆっくり自分のクラスに戻った。

愛する人が居る自分のクラスに。

前兆（後書き）

そういえば書いてませんでしたね。

可未兎はD組、

奈留茂と霰はA組です。

そして奈留茂と霰の会談の最後に何故霰が教室を後にしたかと言うと、作戦会議です。

悪夢

何時だろう。

あの人が壊れだしたのは。

何時だろう。

私が壊れだしたのは。

何時私の歯車は狂ってしまったのだろう。

何時？何時？何時？

私はどうすれば――

「陸々!!」

可未兎の頭上から怒鳴り声が発せられた。

「…ふにやあ？」

目をパチパチさせて擦る可未兎は頭上を見た。

「珍しいな。お前が寝ているなんて…。授業の始まりのチャイムが聞こえなかったのか？起立しろ」

（ああ、）

（一時間目国語かあ…）

可未兎は静かに立ち上がる。

「礼」

委員長の声が教室に響いた。
それに合わせて可未兔は頭を下げる。
そして椅子に着席をした。

「珍しいモノを見た朝だったな。さて…今日の内容は――」

（モノって…）

（基本的人権の尊重をして欲しいですね）

可未兔は首をコキツコキツと心地良い音を鳴らすと教科書を開いて
目を通した。

だが、文章は全くといって良いほど頭に入ってこない。

（何考えてるんだろ私）

（私は…元々生まれなきやいけなかった生き物なんだから…）

（何時壊れたなんて…さ）

（先生の声が良く響く授業）

（男子と女子の会話）

（黒板をチョークで叩く音）

（全部五月蠅い）

（でも――）

（あの静さよりは、）

（良い）

可未兔は目を閉じた。

目を閉じれば広がる光景は――

閉じ込められたような世界。

此処は教室の筈なのに鉄の錆の匂いが鼻を通る。

体中がズキズキと痛みだす。

(！)

パツと瞼を起こした。

「…どうした陸々？また寝てたのか？」

「いえ…スイマセン」

可未兎はすぐさま教科書に視線を戻す。
体中に鳥肌がたっていた。

もう6月なのに。

必死に可未兎は授業の事で頭を一杯にさせる。

時間が過ぎるのが遅い。

何時もならすぐに終わっていた授業が、

今は遅い。

望めば望む程遅く感じる授業。

可未兎は耐えられなかった。

「…先生」

手を弱々しく挙げる。

「なんだ？」

黒板を白く汚していた先生は振り返って眉間に皺を寄せた。

「御手洗いに行かせて…下さい…」

「…？どうしたんだ？顔色が悪いぞ？」

可未兎は「平気です」と答えると立ち上がって扉に手をかけた。

ガラガラッ

静かになった教室に響く扉の音。

「…続けるぞー。次のページを開け」

先生の言葉で我に返ったクラスメート達はもう可未兎を気にする事は無かった。

何故なら他人なのだから。

可未兔は蛇口の水を顔にかける。

水は可未兔に当たって不規則に垂れていく。

可未兔は鏡に映っている自分を見た。

「！」

目を丸くする。

何故なら鏡の自分の後ろにはニタニタ笑っている男が自分の肩に手を置いていた。

口を開いてのどが張り裂けるまで叫ぼうとした。

「キャッ……」

まばたきをした瞬間男は消えていた。

体を縮こまらる。

視界が小刻みに揺れていた。

自分の手を見る。

震えていた。

「ハアハア……」

息があがる。

呼吸がままならない。

（落ち着いて……）

（落ち着いて！）

願いを込めても更に荒々しくなる息。

ドンドンッ

女子トイレの扉が叩かれている。
可未兎は瞳に恐怖の色を表した。

(…アイツ…)

(アイツが来る！)

(嫌！！)

可未兎は頭を抱えた。

「陸タートイレが長いぞー…平気か？」

扉の向こうから声が可未兎の耳に届く。

「…先生？」

「…そうだが？どうかしたかー？」

可未兎の震えは何時の間にか止まっていた。

「いえ…。ありがとうございます」

可未兎は扉を開けた。

「何があった…？てオイ！平気か？ずぶ濡れだぞ！？」

先生は目を見開いた。

「大丈夫です。大して濡れてませんし…顔を洗っただけですから」

「そうか？タオルでも保健室に取りに行くか？」

「ありがとうございます。平気ですので気にしないで下さい」

「ああ…そうか」

「先生…授業は？」

可未兎は先生の横に並ぶ。

先生はポリポリ頬を搔いて苦笑いした。

「サボリ」

「…」

「どうかしたか！？」

「いえ…多大なる御迷惑申し訳ありません」

「いやいや！気にしないでくれ！」

先生は手を振る。

「…ありがとうございます」

可未兎は再度感謝の意を伝えて二人で教室に戻った。

流れる（前書き）

ちょっと短いです。

スイマセン…。

てか宿題が終わらない。（全く関係ない話です）

流れる

「みんなちゃんと自習してたかー？」

扉に手をかけた先生は勢い良く開けた。
生徒達の視線が集まる。

(…)

(何で静かに開けられないのかなあ？)

「…どうしよう」「…ヤバくないか？」「でも言ったら…言ったら…
てさ…」「俺達関係なくよな？」「だって女子だし…」「シッ…バ
したらやられるぞ？」「怖いなあ…」

ザワザワする教室。

一部の女子達はクスリと頬を歪ませている。

「…どうかしたかー？」

先生の問いに一部の女子以外ビクツと体を震わせる。

可未兎は疑問に思いながらも自分の席に着席する。

可未兎は見た。

自分の机の惨状を。

可未兎は見た。

前回の授業まで一生懸命取り組んでいたノート作りのノートがぐちゃぐちゃに汚され、破かれているさまを。

可未兔は見た。

机に油性ペンで『死ね』と書かれているさまを。

動かない可未兔を見た先生は目を見開いた。

「…誰がやったんだ？」

先生は静かに生徒に聞いた。

先生は拳を震わせて聞いた。

それに一部の生徒以外顔を俯かせて、視線を合わせない。

一部の生徒は満足げに、誇らしげに

笑っていた。

「…先生」

「…」

「余分な紙ありますか？申し訳ありませんが次回のノート提出はプリントの裏に書かせて頂いてもよろしいでしょうか？あいにく私は新しいノートを買う程お金に余裕は無いので」

淡々と重大な物事の処理をする可未兔の口調に先生は俯いて小さく頷いた。

「ありがとうございます」

可未兔は資源ゴミの所にゆっくり歩んで使える紙を選別する。

やがて十枚位抱えると静かに着席した。

「…誰がやった？」

そんな可未兔の動作を見ていた先生は静かに聞く。

「誰がやったんだ！」

机を叩いた。

「先生」

「どうした？」

怒りで震えている先生に余裕あるような声で可未兔は呟いた。

「良いですよ」

先生は硬直した。
生徒達は震えた。

「だってこんな事しか出来ないお馬鹿さん達は自分の口で言うほど

偉いわけありませんし——とゆうかこんな事をする事態で偉くありませんし。それに、この行為は『自分に自信が無い為間接的に自分の思いを伝える』というモノですし。つまりこつこつ事をする人達は——」

可未兔は柔らかい声と動作で——

自分の思いを伝える。

「低レベルだと言う事です」

一部の女子の顔が歪んだ。

可未兔はそれを見て満足そうな瞳で周りに言う。

「私は構いませんよ？」

先生は、可未兔の全てに——

生徒は、可未兔の全てに——

恐怖した。

いや、恐怖だけではない。

畏れた。

「どうかしましたか？」

口だけを皮肉的に歪ませる可未兎は――

何の躊躇も無かった。

自分の思いを伝えるのに。

静かになった教室は――

荒々しく色んな感情が渦巻く。

様々な人の想いは――

何処に行って、

何処で消えるの？

可未兔の恋愛物語（前書き）

今回は長すぎました…。

ちょっと退屈かもしれません。

それでも…

見捨てないで下さい。O r Z

可未兎の恋愛物語

数名の女子が伝える。

「…そう」

霰は残念そうな顔で様々な人が書いた脚本を読んでいた。

因みに此処は職員室。

教室とは違い冷暖房がちゃんと設置されている。

生徒からは『教室にも付けろー』と言われているが付ける筈が無いと断言した教頭が霰に自分の椅子を明け渡していた。

つまり霰が高価そうな椅子に座ってその横に冷や汗を垂らしながら教頭は突っ立っているという事だ。

「アイツには私の挨拶をそんな風に思った訳ね？」

「…はい」

「じゃあねえ…今度はアレをね」

女子達は目を見開いて聞いた。

「アレって…もしかして…」

女子はポケットから携帯を取り出して指を指す。

「そうよ？何かおかしいかしら？」

霰は一瞬視線を女子に移した。

その視線に女子達はビクツと震える。

凍傷になるんじゃないかと感じる位冷たい視線。

「いえ…分かりました…」

女子達は御辞儀をして職員室から出た。

霰は女子達が去った扉を一瞥するとフウと息を吐いた。

「教頭」

隣に居た教頭はビクツと震えてから「なっ…何でしょうか…？」と小さく返した。

「これどう思います？」

霰はそんな事を気にする筈も無くバサツと机に紙の束を置いた。教頭は小刻みに震える手でそれを取る。

「ろっ陸々さんのですか…」

「読んで」

「はっはい…」

教頭は目を通す。

『困われ姫

とある所にお姫様が居りました。

お姫様は森の中の古い建物の中でずっと暮らしていました。

外に出された事がない姫は小さな窓から外を覗く位しか出来ません。そんな姫は全く知りません。

何故此处に縛られているのか。

全く知りませんでした。

そんな絶望的な日々を送っていた姫は……とある日に初めて男を見ました。

食事を運ぶ女達の後ろを隠れる訳でも無く堂々と歩いていました。

「誰？」

食料を受け取った姫は女達に聞きました。

ですが、女達は恐怖を瞳に浮かべると扉に鍵をかけて逃げて行きました。

「誰？」

姫は近づく男に二階の窓から聞きました。

「村の人」

男は笑いました。

「村の人……？」

姫は頭を傾げます。

「そっだよ?」

男は姫の手を取ろうと手を差し伸べます。

「何するの?」

姫は手を引つ込めます。

「君を外に出すの」

「無理よ」

姫は顔を曇らせました。

「出来るよ。さあ飛び込んで」

男は腕を広げます。

「無理」

姫は顔を横に振ります。

「じゃあ毎日来るから出来るようになったら言ってね」

男は姫に手を振ると背中を向けます。

「まっ…待って…」

姫は男の背に手を向けます。

男は振り返って笑いかけました。

「また明日」

「……？」

「また明日」

「……また明日？」

男は力強く頷くと去りました。

その後、男は毎日来ました。

雨の日も——雪の日も——嵐の日も——

「何で毎日来るの？」

姫は頭を傾げました。

男は笑って言います。

「秘密」

何日も何日もたったある日——

「私……降りるわ」

姫は決心したように言いました。

「分かった。おいで」

男は手を広げます。

そんな男に向かって姫は…

抱きつきました。

それから――

姫は着替えて街を回りました。

仕立屋さん、お肉屋さん、魚屋さん…
様々な店を回りました。

「楽しかった？」

「楽しかった」

男は笑って、

姫は笑いませんでした。

「じゃあ…これから何処に行くの…？」

姫の問いに男は考えて、答えました。

「俺んちに」

男の家は冗談にも綺麗ではありませんでした。
でも姫にはそれはそれは新鮮に感じました。

「お休み」

男は布団に入るとそう言いました。

「お休み」

姫は寝ました。

寝ている姫の耳に下品な笑い声が聞こえました。

…誰？

姫は重い瞼を開けました。

目の前には何時もの男では無く——下品な男達が居ました。

「姫さんやぁ」「おっお目覚めかい」「良いねえ良いねえ」

色々な言葉をかけられた姫は状況を把握しようと顔を上げました。

牢屋でした。

「…何で牢屋…？」

顔を上げた姫に男達が笑いながら答えました。

「お前を売る為さ」

男達は——奴隷商人でした。

「そうなんだ」

姫は驚きもせず答えました。

「オイッ！」

男が息を切らしながら来ました。

「村人だあ！！」

男達が居る場所に村人が襲って来たのです。

「ギャアー」

姫は血祭りにあげられている男を見て、
笑いませんでした。

「そついやアノ男も奴隷商人なのかな？」

姫の独り言のような問い。

その問いに答える人が来ました。

「違うよ」

血を頬に付けた男が居ました。

「何で私を助けたの？」

「……」

「何で私を外に出したの？」

「……」

男は牢屋の扉を開けました。

「何で私を――」

姫の問いは途中で途切れました。

何故なら男が姫に抱き付いていたからです。

「秘密」

男は独り言でも言っているかのように呟きました。

「秘密……？」

「嘘。本当はね、」

男は姫の瞳を見つめて言いました。

「俺嫌われ者だからさ、仲良くしてくる奴を探してたんだ」

「ふっん……？」

「で、生贄のお姫様が居るって言われたからさ」

「生贄？」

「そうだよ？あらゆる災厄の身代わりになる人間」

「それって……」

「そう、君」

「
…」

「だから、俺と仲良くしてくるって思って」

「そうなんだ」

姫は酷くつまらなそうに言いました。

「でさ、」

「私帰る」

「へっ？」

「私帰る」

姫はスクツと立ち上がってゆっくり歩き始めました。

「待つて…待つて！」

男は姫の肩を掴みます。

「…何？つてふおわぁー！！」

振り返った姫に、男は再度抱き付いていました。

「それでさ…俺…」

男は頬を少し朱色に染めました。

「？」

「一緒に住まないか？」

「…んっ？」

「一緒に住まないか！」

「…」

「…返事は？」

姫はまた前を向いて、
頭だけを後ろに向けて言いました。

「秘密」

おしまい

『

「…どうかしら？」

「…まあささやかな愛で、純愛ですかね…？」

霰はへエ？と頭を傾げて教頭の手から紙束を取りました。

「つまらない」

「…」

霰は歯に力を入れる。

歯がギシツと小さく悲鳴をあげた。

「そもそも恋愛は壁があって燃えるものよ！なのにコレは…！」

「…」

霰は可未兔のレポートをグシャツと潰す。
憎たらしそくに。

「しかもコレ、一回も消した痕跡が無い」

霰はグシャグシャになったレポートを広げて、
腕を震わせながら言う。

「何よ！なめてるの！？こんな奴に奈留茂君を…！」

教頭は震えてる。

自分が何かしてコノ子を怒らしたらと考えると震えが止まらない教頭を余所に霰は怒りを爆発させる。

「クソツ…！クソツ…！」

「あの…」

「何よ!?!」

怒りに満ちた瞳で睨まれた教頭は小さな悲鳴をあげた。

「何よって聞いてんの!」

「すつすいません…」

最早涙目の教頭に霰は更に怒りを増幅させる。

「何!?!自信満々に書きやがって!腹立つわ!」

「それは申し訳ありませんね」

突如、霰の耳に届く言葉。

霰はグシャグシャのレポートを手にししながら前を向いた。

そこには、

可未兔が居た。

「恋愛なんて分からないものなんで」

可未兔は睨みつけるように上から霰を見下す。

「…つつ!何で貴方に見下されなきゃならないのかしら?」

霰は何時もの上品な口調に変える。

「？短気だから？」

「違うわよ。私は何時だって穏やかよ」

可未兔は「ふうん？」と鼻で笑って、指を指した。

「ではソレは何でしょうか？」

可未兔が指したものは――

レポートだった。

「ゴミよ？」

「でしたらゴミはゴミ箱へ」

可未兔はヒョイと霰からレポートを取り上げると近くの「ゴミ箱」に放り込んだ。

「……」

「どうかなさいました？」

「いえ、用事を思い出したわ。また後でね」

霰は静かに立ち上がるとドアに手をかけると静かに開けて、静かに去った。

「陸々さん…どうかしたのかい？」

教頭は可未兔に声をかける。

「いえ、レポートを捨ててもらおうと思って此処に来たしだいではもう用は済んだので」

可未兔は一礼するとそそくさと職員室から去った。

「問題起こさないでくれよ…」

教頭の必死の願いは虚空へと消えた。

役決め（前書き）

すいません。

合宿中で書けませんでした。

役決め

次の日も——次の日も——

静かで落ち着いてて。

これが——中学生なのかな？

可未兎は溜息を吐く。

結局このクラスが書いた脚本は全て気に入らなかった霰は散々文句をたれて御機嫌ななめな感じで家に帰ったらしい。御陰で教頭がぶっ倒れた。

ぶっ倒れた教頭は「お静まりを——」と始終ずっと呟いて病院へ。

…哀れだな。

可未兎は密かに同情した。

そんな朝である。

「先生……。結局演劇祭は何になったんですかぁ？」

やんなくていいんじゃない？とでも言いそうな程間延びしたダルそうな声を発した生徒に先生はえーとだな、と語り始めた。

「…うーん？あれだよ…七人の小人の…」

疲れて目の下にくまを作った先生は考えて考えて…

結局答えが出ないので、一人の女子が言った。

「白雪姫ですか？」

「それだよ。それそれ」

クラス中が大丈夫なのか？と語った瞳で哀れな視線を作り出して、視線は勿論目の前の先生に。
可未兎はただただ呆れるだけだった。

「てかそれじゃ学年生徒の百六十人使えんのかよ？」

一人の男子の言葉にクラスメートが頭を傾げる。
可未兎も頭に浮かべる。

（というか）

（白雪姫って話自体私知らないじゃないですか）

（何人なんだろう？）

「魔女：一人、王子一人、お姫様一人、小人七人、あれっ？他に居た？」
「十人しか居ねーじゃん」
「つうか1/16じゃん」
「まぢ笑いみたいなの？」

男子の会話に花が咲いてきた所にジョーダン先生が教室に入ってくる。

（てか…）

（居なかったんだ…）

（気付かなかった…）

「ナンカ霰ガールがちょビットねえ、オリジナリティにスルラシイよ！」

元気な声。

何故か分からないが興奮しているのか頬がほんの少し赤い。

（楽しみ…なんだ）

（楽しいねえ…）

「んでなあ…取りあえずコノクラスの役はこれだ」

先生は大きな紙を黒板に貼り付ける。

しわくちやの紙は黒く汚されていた。

その黒い汚れのようなのは——小さな小さな文字。

『魔女の弟子、女子5人、男子5人。雑魚役男子7人。魔女、女子1人。林檎役、女子1人、男子1人。』

裏方（残りの人）

ライト、セットの準備

□

明らかに女子が書きました　って言うほどの丸文字の文を読んだ可
未兎は呆れ顔で溜息を漏らした。

（これは裏方が妥当だな）

（良かった…）

（演技嫌いなんだよねえ）

（つつか…）

（このクラスの役残念だな）

「…じゃあ拳手しろよ。ああ、因みに陸々」

「…？何でしょうか？」

先生に可未兎の無の視線が向けられる。

先生は、『可哀想な』とでも言うような哀れみの視線を可未兎に返した。

「お前は…何か演技をするべきだと…たつま…私は思う…」

一句一句つらそうに言う先生を見て――

可未兎は口を一瞬開かせた。

（…成る程）

（龍巻さんって、）

（親切だね）

「分かりました。龍巻さんのアドバイスありがたく頂戴致します」

可未兎は先生に旋毛^{じむぎ}を見せる位頭を下げる。

そして顔をあげて――

「では、林檎役にでも。お願いします」

（一番楽そうな感じだし）

「…分かった。ありがとう…な」

「ドウシタンです、エンジョイしましょう!」

静かな空気を詰め込んだ教室に音が響いた。

ジョーダン先生が手を叩いたのだ。

それに合わせて様々な口から言葉が紡がれる。

「じゃあ俺裏方」「んー？俺は林檎役にしようかなー?」「テン

メエ…！いくら陸々さんが入ったからって…！なら俺も！」「俺我慢してたんだぞ！テメエ自重しろ！」「私魔女が良いっかなあ」「じゃあ私弟子い」「裏方とかあ重いの運べなあい」「私…裏方で…」「ウチも裏方で！（演技が嫌だもん！）」「私わあ、魔女が良いなあ」

「シャラップ！」

ジョーダン先生の発音が完璧な英語が日本語を制する。

「じゃあ後で相談しときなさい。今日中に提出」

キンコーンカンコーン
チャイムが響いた。

「起立。礼」

頭を下げた可未兎は自分の鞆を手にすると——とある教室に向かう。

クラスメートは遅しい可未兎の背中を見送った。

役柄（前書き）

スイマセン、

昨日間違えて『黒白国家』のを此方に載せました。

間違えて読んだ方、

スイマセン…。

役柄

「私い…皆に染まって欲しくないよ…」

可未兔は自分が制服である事も気にせずにフラリと崩れる。

「お願いだから…止めようよ…」

頭を上げると数人の男子と女子が居る。

可未兔は顔を悲しそうに歪ませた。

「お願いだから…毒林檎にならないで！」

「ハイ、カットー！」

何故か監督風な格好をした霰が拡声器で可未兔の可笑しな言葉を切った。

「陸々さん…凄い演技力…」

さっきまで見下していた女子が呆れた様子だ。

もうお分かりだろうが、現在演劇祭に向けて猛特訓中。

「…取りあえず陸々さん達はもう良いわ。他の人達と変わって」

林檎の被り物をした不気味な集団は劇場から降りていく。

可未兎はゆっくり吐息を吐いてから被り物を外す。

「陸々さんは…未来女優になったら…？」

同じクラスの男子は可未兎に素晴らしい程輝いている瞳を向ける。
可未兎はブンブンと頭を横に振る。

「私沢山の人に見られるの嫌いですし、可愛くもないですし、演劇力もないですし」

周りの人達にとっては皮肉にも取れる言葉を出すと「では私は帰ります」と言って鞆を手にした。

「まだ終わってないわよ？」

霰がいきなり可未兎に話しかけた。

「一樣言いますと、今放課後で部活で参加してない方達も居るじゃないですか。私だけに言うのは差別じゃないですか？」

「どうせ用事なんて無い気楽な女子が何言ってるの？」

「残念ながら用事はあるんです」

可未兎は後ろに居る霰を一瞥して言う。

「何よ？」

霰は眉を潜める。

「割引セール」

「はっ？」

思わずポカンと口を開けた霰に呆れたように溜息を吐いてから振り返って言った。

「知らないんですか？今は…六時半でしょ？今から行くと魚が安いんですよ。ついでに今日は米が割引されるらしいんです。七時に。今から行くとギリギリ間に合っんですよ」

可未兎はそう言うのと背を向けて走った。

皆驚きのあまり動くと言う行動に出せない。

それは自然とでも言えるだろう。

だって学校のマドンナと言われてもおかしくない女子が割引セールなど…。

「意外と庶民的だな…」

誰かが可未兎の華奢な背中を眺めて言った。

奈留茂は家に帰っていた。

「なんで俺が王子役なんだよ」

思わず呟いた言葉に頭で回想する。

「王子役は…奈留茂君で良いよねえ…?」

恍惚とした笑みで周りに同意を求める霰に全てのクラスメイトが首を縦に振る。

男子は顔を汗でビシャビシャにしていた。

「ありがとうね?じゃあ決定で」

ニツコリと笑ってから着席をしようとした霰を奈留茂は――

「やらねえよ」

睨んだ。

思いつきり鬼の形相を作り出して睨んだ。
そんな奈留茂を見て霰はクスツと笑って、

「私が本を書いてるんだけど、とある女子に少しポロリをしてもらおうかしら?確かその子、林檎役だったかなあ?」

林檎役――可未兔だ。

奈留茂は可未兔が何役か知らないが多分霰は可未兔の事を言いたいと分かった。

チツと舌で音を鳴らすと霰を一瞥して奈留茂は前を見た。
それしか出来なかった。

家に着いた奈留茂は再度舌打ちをする。

ゆったりとリビングでテレビを見てソファに腰掛けた。

『ブーブー』

ポケットに入っている携帯が小刻みに震えた。
FROM：母さんと書いてあるメールを見る。

『今日残業で家でご飯が食べれないみたい…。だから食材を買ってきてもいいし、レストランで食べて。因みにお姉ちゃんは確か…友達んちに泊まるらしいから。宜しく（ー●ー）』

奈留茂は溜息を吐く。

「レストラン一人とはかなり痛いだろうなあ」と小さく呟いてもう片方に財布が入っている事を確認する。

手に確かな革の感触を感じた奈留茂は数回頷くと鍵を手には家を出た。外に出て鍵がかかっているか確認して自転車に乗る。
足を動かす。

自転車はゆっくりとスピードを上げていった。

「…可未兔」

晴れない心に少しでも希望を与えてくれた人の名を呟くと力強くハンドルをきった。

買い物？（前書き）

思ったより長くなりました。

深夜投稿スイマセン。

買い物？

「うーん」

伸びをしてフウと息を吐いてリラックスする奈留茂。
周りには魚の生臭いがプンプンしている。

「何買おつかない？ やっぱり焼き魚だし、…何が良いかな？」

頭を傾げて魚をまじまじと眺めてハアと再度溜息を吐いた。
奈留茂は瞳だけを動かして周りを見た。

何やら「見てみてアノ子。俳優さんかしら？」と世間話をするおばさん方が居た。

かなり迷惑な話だ。

そうやって見られているのははっきり言って疲れるモノだ。

最初の時は「俳優さんに見えるー見えるー？」と笑いながら聞いたが、今は違う。

自分が『俳優さん』みたいだから、

とある少女と好きな時に好きなだけ会えないのだから。

「…やっぱり魚は良いっか」

くるつと方向転換して野菜コーナーに足を向ける。

いや、向けて歩こうとした。

「痛っ…」

いきなり下から衝撃が。

だが、奈留茂の視界には残念ながら衝撃物は見えない。
恐る恐る下を見る。

「スイマセン、ちゃんと前見てなくて…」

自分よりかなり小さな小柄な少女は頭を下げた。

「いや、此方もスイマセンでした。大丈夫ですか？」

（髪黒くて、短くて…）

（まるで可未兎みてえ）

（まあ可未兎の方が可愛いつか）

「…どうかなさいましたか？」

満足そうに頷いている奈留茂にちょっと変人だと感じたのか言葉が
冷たくなっていく少女。

勿論奈留茂は気付かない。

何故なら——自分の世界に浸り始めてしまったのだ。

「何時か会えるかなあ…」

何もない空間に目を向けて幸せそうな空気を醸し出した奈留茂に少
女は頭を傾げてから頭を再度下げた。

奈留茂は見えていない。

少女の顔が驚きで目が見開いている事に。

「…んっ？」

数分後に自分の世界から帰ってきた奈留茂は前を見た。

そこには、少女が居た。

そう、少女。

まだ五月から六月かけた湿気が沢山あり、気温が少し高いかもしれない季節だが、その少女はノースリーブを纏って惜しげなく腕の上で伸びている白い肌を見せつけていた。

ノースリーブには少女とは思えないような膨らみがある。

そして、下は短パン。

そちらもスラリと滑らかな足が伸びている。

まるで女優の様な美しい体を保持する少女は――

「可未兔…！？」

奈留茂は驚きのあまり一步下がった。

可未兔は可未兔でポカンと呆けた空気を作り出していた。
数秒たった後可未兔が恐る恐る唇から言葉を出した。

「何で…奈留茂さんが此処に…？」

可未兔は常人より長い人差し指を下に向ける。

「いやっ…可未兔こそ…」

視線をあっちこっちに向ける奈留茂の口元は少し緩んでいる。

「私は…今日の夕飯などの準備の為です…」

「夕飯の準備…」

「…」

パツとポケットから携帯を出すと可未兎は元々大きな瞳をまた開かせた。

「可未兎どうし」

「お米！」

可未兎は目にも止まらぬ速さで突如消えた。

奈留茂にとって理解出来ぬ「お米！」という言葉を残していった。

「…お米？」

奈留茂はハアと長い息を吐き出してクスツと唇で弧を描かせた。そして、可未兎の向かった場所に足を進めた。

「米ー！安いよぉー！」

定員の元気な声がこだまする。

だが、元気な声の元に集うのは——
餌に誘われた猛獣達だった。

「米ー！私のよー！」「違っ！ちよつ邪魔よ！」「あんたがね！」

「退きなさいよ！」

と醜い争いを繰り広げている。

可未兎はその猛獣達の間を縫うように走り、

米（財宝）の前に立った。

だが、それを

獰猛な猛獣が許す筈が無い。

静かに可未兔の華奢な肩に手を置いて、
引っ張る。
だが、

可未兔の執念がソレに負ける筈が無い。

さっと手を払って米を――
抱きしめた。

そして、また猛獣達の間を縫って、

米（勝利）を勝ち取った。

「ふっ……」

可未兔は溜息を出して満足そうに頷いた。

「良かったな」

かごに米を投入した可未兔は声の主を見た。
奈留茂だった。

「どうした？」

（忘れてた）

（なっ……）

「奈留茂さん……」

可未兔は瞬きをした。

「どうしたんだ？」

んっ？と言いながら頭を傾げる。

可未兔は左右に視線を向けて上目遣いで奈留茂を見た。
勿論、無意識である。

「…っつ！」

少し頬を赤くする奈留茂。

可未兔は気付く訳が無い為、頭を傾げるのみ。

奈留茂はブンブン頭を横に振って、笑いかけた。

「他に何か買うのか？」

「…魚を」

「米と魚だけ？」

可未兔は頭を少し横に振って、

「調味料とかです」

ぼつりと小さく言った。

「そっか。かご俺持つよ？」

奈留茂は自然な動作で可未兔の横に並ぶとかごに手を伸ばした。

可未兔はその手を掴んで「平気です」と言う。
だが、

奈留茂は可未兔の言葉を聞いていなかった。

可未兔は頭を四十五度傾ける。

奈留茂はその動作さえ見えないのか硬直したままだった。

奈留茂はひんやり冷たい、だが心なしに温かい感触を感じていた。
その温もりは——何の苦痛をも耐えさせてくれるように、優しく、
温め、和ませてくれる。

（何時、この温もりを——）

「奈留茂さん？」

「はえっ？」

呆けた声を出した奈留茂を見た可未兔は笑いもせず、

「大丈夫なので、その…離して下さい」

「あれっ？」と頭を傾げた奈留茂は下を見た。

さっきまで可未兔が掴む構図だったのが何時の間にか奈留茂が掴んでいる構図になっていた。

「あっ…悪い」

「…いえ」

可未兔は動じもせずにかごに手を添えて魚コーナーに足を向ける。

奈留茂もソレに並ぶ。

「何で付いて…くるんですか…？とゆうか…そんなジロジロ見ない

で下さい」

魚を選んでいる可未兎は奈留茂をチラ見して魚に再度視線を戻す。

「んっ？気にするの？」

「当たり前です。視界に入る異物なので」

可未兎は全てを言い終わった後ハアと分かりやすい溜息を吐いた。ソレを見た奈留茂は落ち込む所か、顔を綻ばせた。

「…何ですか？」

「いやっさ…」

奈留茂は楽しそうにニコニコ笑う。
笑う。

「可未兎とこんなに居たの…久しぶりだなんて…」

可未兎は一瞬目を見開いて奈留茂を見たが、すぐに魚に視線を戻した。

「そつえば…そうですね」

素っ気なく返した可未兎は奈留茂をチラリと見つめた。
凛々しい横顔だった。

「だからさ…何か楽しくって」

「楽しい…」

「そう、楽しい」

奈留茂は魚から可未兔に目を向ける。

可未兔も奈留茂を見ていた。

数秒間、止まる。

この数秒は一瞬だが——二人には、一時の幸せな時間だった。

「魚…コレにします」

『20%OFF!』と大々的に書かれたパッケージの魚を手にする
と米が入ったかごに乗せる。

流石にキツいのか両腕を震わせている可未兔。

奈留茂はそんな可未兔を見てクスリと笑った。

「なっ何で笑うんです？」

「いやっ…さ…可未兔が…可愛いなって」

可未兔は瞬きをして「はいっ？」と聞き返す。

奈留茂はまたクスリと笑って、

「可未兔が可愛いなって」

再度言った。

可未兔は頭を傾げてから、ぷいっとな顔を背けた。

奈留茂は心底楽しそうに笑ってから可未兔が懸命に握っているかご
に手を伸ばした。

「…何です？安売りの米は渡しませんよ」

「持つよ」

ヒョイツと極度に疲れている可未兔の華奢な腕から意図も簡単に取り
つて片腕でかごを運ぶ。

可未兔は一瞬啞然とした顔を作り出したが、左右に顔を振ってから
先に進む奈留茂に並ぶ。

「だっ大丈夫です！持ちます！」

「良いつて。久しぶりに可愛い可未兔を見れたんだし♪」

「次は調味料だっけ？」と楽しそうに言々とスタスタ先に進む奈留
茂。

可未兔は一瞬頬を膨らまして奈留茂を追った。

買い物？（前書き）

いやあ、

宿題がヤバイ。（スイマセン）

買い物？

「そっぴゃ…さ。可未兎、アイツに変な事されてねえか？」

調味料コーナーを覗いている可未兎に奈留茂は笑みを消して、つらそうに眉間に皺を寄せて話しかけた。
対して可未兎は、

「“アイツ”って誰ですかー？」

奈留茂の顔も見ないで調味料を選ぶ。

「気持ち悪いフアンクラブのリーダー…」

「ああ、龍巻さんですかー？何かされたって…んー？ああ、されま
した」

「された！？」

奈留茂は怒りが籠もった瞳を開いて声を荒げた。

「ていつても大層なモノでは有りませんよー？」

「なっ…何をされたんだ…？」

怒りで震える心を抑えて可未兎を見つめる。
可未兎はどうでもよさそうに話した。

「机の落書きとか…ああ、最近イラついたのはアレですね」

「アレって…!？」

可未兎は奈留茂を一瞥してからフウと溜息を吐いた。

「まずは落ち着いて下さい」

「…!悪い…」

奈留茂はかこの取つてを握りしめる。

再度溜息を吐いた可未兎は奈留茂に向かい合う。

奈留茂は「どうした…？」と小さな声で聞く。

可未兎は奈留茂の胸元に手を置いた。

可未兎の手に奈留茂の激しい振動が伝わる。

奈留茂は可未兎の手を見つめる。

奈留茂はソコで気付く。

自分の心臓の規則正しい心拍が早い事に。

(…もしかしてソレを伝えたくて?)

奈留茂はすうと息を吸ってゆっくり息を吐いた。

ゆっくり、ゆっくり心拍が落ち着いていくのが分かる。

「まあある程度落ち着きました？」

「…悪かった」

可未兎は静かに手を離すと話し始めた。

「えつとですね…」

可未兎は苛立ちのあまりに一番端っこの教室に足が向かう。
カツカツカツ

規則正しい足音が廊下に響く。
教室に着く。

『3 - A』と書かれたドアを勢いよく開けた。

数名の生徒は居ないのか寂しく立っている机がガタンツと揺れる。
教室の生徒の視線が可未兎に集まる。

そんな事を気にせず可未兎は教室を見渡す。

(居た)

一人の生徒に目が行く。

その生徒は――

「龍巻さん」

可未兎は静かな怒りを霰に向ける。

「……どうしたんですか？陸々さん？」

霰は可未兎の心中を悟ったのか笑いもせず上品に返す。

「何で先生に言っただんです？」

可未兎は静かに睨む。

霰はクスツと笑う。

「いや、陸々さん綺麗だから、演劇アドバイスやった方が良くないかしらと思つて。だから先生に忠告したまでよ？」

ニコニコ笑う霰を見た可未兎は目を細める。

「私自身に言えば良いんじゃないですか」

「そんな時間は無かったわ。私、ある女子とは違って忙しいですもん」

可未兎はいやらしい笑みを浮かべる霰を見て、ハアと溜息を吐いた。

「…何よ？」

霰は笑みを消す。

可未兎は視線を下に移して、また霰に視線を移すとハアと溜息を吐いた。

「時間なんて…そんなもの貴方の権力で関係ないでしょ？ただ単純に自分に自信が無いだけなのに。そんなみっともない言い訳を言つて楽しいですか？」

可未兎はフウ…とわざとらしい溜息を吐いて、

「私が馬鹿でした。こんな事で怒って。無駄でした。だって、」

可未兎は溜めに溜める。

霰に柔らかく優しく言った。

「低レベルなお嬢様なんですから」

可未兎はそう言つと背を向けて、教室に戻った。

「…って事ですかね？」

可未兎は奈留茂に伝え終わると醤油を手にして、「これ安いし…これにしようかな…？」と財布と相談する。

「…可未兎？」

「はいっ？」

財布との相談を切って奈留茂を見る。
迷いの無い瞳が奈留茂を映した。

「…何でもいいや」

「そうですね？では、」

かごに醤油を投入した。

奈留茂の腕がミシリと小さな悲鳴を上げた。

「…可未兎さーん？」

奈留茂の声に可未兎が頭を傾げる。

「…何か問題がありましたか？」

「いやあ人が持つてあげてるのにコレは無いんじゃないかなあ？いやあ別に文句は全くありませんけどねえ？」

「…意味が分かりませんか？」

「うつわーイジメだあ。ある意味イジメだあ」

「そんな事は良いですから、ほら買いに行きますよ?」

可未兔の指が会計所を指す。

「…了解」

奈留茂に頭を傾げながらも可未兔は普通の速さで会計所に向かう。
奈留茂は両腕で重い荷物を持ってついて行く。

「お会計は」

「カードで」

「分かりましたあ」

営業スマイルを見せつけた若手な感じのアルバイトに可未兔はカードを手渡す。

「一回で?」

「はい」

会計を終えた可未兔は満足そうにエコバックを持つ。

「終わった?」

「ええ。貴方は買い物良いんですか？」

「まあ良くないけど…残り物でも食うわ」

頭を掻いた奈留茂に可未兎は

「別に少し位なら夕食構いませんけど？」

エコバックを手渡す。

「えっ…マチで!？」

「ええ。荷物を持ってくれれば」

「持つ!持つ!」

無邪気な子供の様に喜ぶ奈留茂。

可未兎はまあ良いつかと楽しそうに息を吐いた。

食事と絶望

奈留茂は酷く緊張している。

それはもう、歩き方がおかしくなる位。

今、猛烈に緊張しているのだ。

まあ思春期男子には仕方がないのかもしれない。

なぜなら、今奈留茂は可未兔の家に居る。

家といってもアパートで1LDKの大きさ。

独り暮らしには丁度良い大きさだ。

漫画とかだと、

「うわぁ意外と女の子つつう感じの部屋」

というコメントがあるが可未兔の部屋は“女の子”というカテゴリよりも“働く女の人”の方が合う。

調理器具や電子レンジなどの電子機器がちゃんとそろってある。

だが、テレビは無い。

無駄な物が無いのだ。

冷蔵庫も小さいサイズだし、電子機器がそろってあるといっても、女の子にとって必要そうなドライヤーは無いっぽい。

「うわぁ…シンプル」

奈留茂のコメントはそれだけだった。

可未兔は奈留茂のコメントを聞き流すかの如く、自然な動作で米や調味料を置く。

「何が食べたいですか？」

可未兔は静かに聞いた。

奈留茂は口角を上げて、答える。

「可未兔の愛が詰まったモノ！」

元気な答に可未兔は笑いもせず、

「作れません」

断言した。

奈留茂には大ダメージだ。

「うう…可未兔がそんな薄情者だなんて…うう…」

奈留茂のうずくまってチラチラ可未兔を見て唸る言葉に可未兔は心が変わった――

訳は無いので、可未兔は普通に「じゃあ和食にしますか」と言って台所に向かった。

リビングに居て卓袱台に顎を乗せていた奈留茂には退屈というモノしか得られない為、すぐに台所に奈留茂も向かう。

というか、実際問題可未兔の料理をしている光景が見たいという欲望もある。

「夕食何なに？」

可未兔の邪魔にならない程度の距離で見守る奈留茂はコミュニケーションを求めているらしく、子供のような明るいオーラを放っていた。

可未兔は奈留茂を一瞥して、

「わかめの味噌汁と鮭のチャンチャン焼きと白飯とです」

「白飯って……？さっき買ったばかりだから無理じゃないのか？」

んー？と頭を捻って数時の前の事を思い出す奈留茂。

「アレは今回の次に使用します」

奈留茂の問いに可未兎は簡単に答えると野菜を切り始める。
鮮やかな動き。

一つ一つの動作に無駄の無い可未兎。

（何で……）

（無駄がねえんだろ？）

奈留茂は過去の事を考えた時にそれも考えた。

可未兎の一つ一つの動作に無駄を感じた事は余り無い気がする。

確かに、変な所もあるが——奈留茂に会う前は彼女は隠れたアイドルとして日々読書と勉強に励んでいた彼女はもつと無駄が無かった。
（人と関わるつつう事は無駄な動きを増やすって事なのかなあ？）

奈留茂の悩みのような——違うようなモノを悟る気が無い可未兎は味噌を取り出したりなど家庭的な主婦の動きしかなかった。

家庭的——は違う。

全てを壊した家庭の家庭的な行動。

それだけだった。

（うーん？）

「すみません。鮭のチャンチャン焼きを作るんで結構かつちやいます」

可未兎のいきなりの言葉に奈留茂は体を震わせた。

「あっああ。さっサンキュー」

ぎこちない笑みを浮かべた奈留茂に可未兔は頭を傾げる。
だが、すぐに野菜に視線を移した。

「可未兔お」

「何ですか？」

「メアド交換しない？」

「メアド交換？」

可未兔は良く分からないとでも言いそうな素振りを見せる。

奈留茂は自分の真っ赤な携帯を取り出して、可未兔の携帯を探した。

「何処お？」

「…私のポケットです」

可未兔は溜息を漏らして「取っても良いですよ？」と言った。
ズボンのポケットには確かに携帯らしき四角形の物が見えた。
だが、

それを取るという事は――

奈留茂は理解していたので頭を勢いよく横に振る。

「…どうしたんですか？」

（頭が良くて鋭いのー！）

（何でこんな感じのは鈍感なのー！？）

奈留茂の頭はパニックに陥る。

「おっ…お願いだから…自分で…ぐはっ…取ってくれ…」

迫真の演技——というか奈留茂にとっては本音なのだが、可未兎は頭を傾げて「はぁ…分かりました」と言いながら手を洗って携帯を取り出して奈留茂に渡した。
白い携帯だった。

「ありがとうな」

奈留茂は笑ってから息を吐く。

（良かったー！）

「…大丈夫ですか？」

「うん、平気だぜ？」

「…そうですか」

奈留茂の言葉に可未兎は納得してない様子で作業に入った。
奈留茂はリビングに戻る。

「フーフーン」

鼻歌を歌いながら床に座って可未兎の携帯を開こうとした。

「んっ…？」

可未兔の携帯には端っこに赤黒い模様があった。

「…血…？」

なわけ無いよな、と自分を納得させて携帯を開く。

待ち受け画像はありきたりな青空だった。

可未兔らしいなっとなんて笑ってから携帯を弄り、赤外線送信の画面にさせる。

勿論、片方の携帯は受信モードにして。

「送信つとっ」

今度は逆の事をしてアドレス交換を済ます。

奈留茂は可未兔の背中を見た。

フライパンを使ったりしている可未兔。

ちよっと見ていいかな？と子供の気持ちで可未兔の携帯を弄る。

アドレス帳を開く。

『涙香和奈留茂』と『ジョーダン先生』のみ。

「…」と言葉を失いつつも今度はデータフォルダを開いた。

全データを開く。

写真が四枚あった。

一つ目は待ち受け画像の写真。

二つ目はにっこり笑った老婆と俯いた表情が見えない子供の写真。

三枚目は新聞の写真だった。

そして四枚目は――

奈留茂は電源ボタンを押した。

何で…何でコイツの写真が有る。

頭が痛くなる。

「大丈夫ですか？」

可未兔は大して心配そうな顔は作らず無表情で聞いた。

「……」

奈留茂は俯いた。

「……？」

可未兔は頭を傾げつつも完成した料理を皿に盛り付ける。

可未兔の姿をチラ見する。

何時もの姿。

何でそんな——可未兔からあの画像が？

奈留茂の頭を何かが支配する。

婆ちゃん……。

頭に浮かぶ単語。

「……『婆ちゃん』とは？」

可未兔の声で奈留茂は我に帰る。

何時の間にか口に出していたらしい。

「……いや、……何でも無いよ」

奈留茂は顔を笑わせた。

可未兔は皿を置くと頭を捻る。

何でコノ人は、

そんな悲しい、引きつった笑みを作るの？

可未兎はこの表情を知っている。

自分の周りの大半の人間がその顔を作って無理矢理自分と会話をしてくれた。

その顔は――

「奈留茂さん、ご飯食べて下さい」

可未兎の言葉に奈留茂は何も言わずに頷いた。

割箸を手にすると「いただきます」と小さく言って口に味噌汁を流した。

わかめの良い味わい、味噌の風味。

美味しい、と思った。

でも、苦しい。

「……どうですか？」

可未兎は鮭を口にしながら奈留茂に聞いた。

「……美味しいよ」

奈留茂は笑って答えた。

可未兎は「そうですか……」と大して嬉しそうに返さずに箸を進めた。

静かに、

時は過ぎた。

奈留茂は「ごちそうさま」と言って箸を置く。

可未兎は「お粗末様でした」と返した。

奈留茂は「ありがとう」と言って静かに帰った。
可未兎は頭を横に振って奈留茂の背中を見送った。

その、辛そうな背を。

食事と絶望（後書き）

さて、2人の過去はどんな感じなんだろうかねえ…

崩れる（前書き）

少し短いです…。

スイマセン。

崩れる

(…どうして)

(奈留茂さんはあんな顔してたんだろう?)

演劇祭一週間前になった今日、可未兎は頭を悩ましていた。

(…後でメールしようかな…?)

そこで頭を横に振る。

(生活費が駄目になるから駄目だ!)

「ねえ陸々さん」

可未兎は聞いた事のある声を無視する。

開いていたページがやっと次のページに移る。

「…聞こえてる!？」

可未兎の肩を誰かが掴んだ。

可未兎は不愉快そうに顔を作って振り返る。

霰がいた。

「…はあ？」

「何よ。昨日の事よ。昨日」

可未兎ははあと溜息を吐いてピラリとページを捲った。

「ちよっ…何無視するのよ!」

「…学校です。公共の場です。静かにしたほうがよろしいのでは？」

「ふんっ…貴方に言われたくないわ」

霰の言葉に可未兔は、

「はいはい」

相手にしなかった。

「！貴方ねえ！ちよつと来なさい」

可未兔は無理矢理立たされるとトイレに連れてかれる。

何時の間にか居たフアンクラブのメンバーに呆れたように溜息を吐いたのは言うまでもない。

「何ですか？」

念の為に鞆を持ってきたので、その中に本を入れる。

「貴方、イジメられたいの？」

「私はマゾじゃ有りません」

仁王立ちの霰は顎で命令する。

周りのフアンクラブの子達が可未兔を抑えた。

鞆がゆっくり落ちた。

中身がバラける。

携帯や教科書、筆箱が。

「鍵閉めた？」

「はい……鎖でしたか」と

可未兔はドアを見る。

ドアノブの周りには豪華な銀色の物が巻かれていた。

「反省しないのが悪いのよ？」

霰の手が可未兔の制服に触れる。

そして、一つ一つのボタンが外される。

可未兔はすうと息を吸う。

そして、

吐いた。

「キヤアアアアアアアアアアー！！！」

可末兔の絶叫がトイレのような小さなスペースでは抑えきれず廊下にまで響く。

霰達の手が止まる。

そこを見計らつて可末兎は無理矢理腕を振り払つてドアへ……ではなく、反対方向の窓へ。

「何してるのよ？捕らえなさい」

霰の言葉に女子達はコクンと頷く。

「何で…服なんか脱がすのよ!!」

可未兔の振り乱した声に霰はクスツとほくそ笑んだ。

「自業自得って所かしら？」

その言葉に今度は可未兔が笑った。

「ねえ… 何で私がコッチに来てるか分かります？」

「…？」

「良い見晴らしですよねえ。今は朝ですよ？裏口側の窓ですからね、綺麗な庭が見えますね？」

ボタンを一つ一つ元の形に戻して、外に体を出した。

「… 貴方っ何を…！」

「朝には係員の方が庭の手入れをしてるんです。そこで私が落ちると、」

可未兔は体をトイレに戻して、

「ドシャーン」

無表情で言った。

「… 権力で、どう」

「どうにかするって、それでも貴方は初めて死体を見れるんです。良かったですね？」

可未兔の言葉に霰ではなく、周りの女子があたふたする。

「死体、見たいんでしょう？では、」

霰が顔を歪ませる。

「見せてあげましょう」

そう言って、可未兔は落ちた。

ゆっくり。

ゆっくり。

女子達の瞳に驚愕という感情が映り、崩れた。

崩れる（後書き）

さて、可未兎はどうなるんでしょうか…？

因みに裏口とは西門の事で、可未兎達が居るトイレは三階です。

電話（前書き）

一日？位の時私にとって凄いアクセスでした！

ありがとうございますー！！

電話

「早く外へ！」

霰の声に女子達が震えながらドアの鎖を解いて、
外へ向かう。

着いたが、そこには可未兔の亡骸は無かった。
死体すら無い。
血の後も無い。

「……？」

ポカンと口を開けた女子達に霰は瞬きをしながら女子達に命令する。

「さっ……探しなさい……！」

女子達は震えながら探す為に蜘蛛の子を散らすように分散した。

「……ふう」

一人の女子が服を叩きながら階段を登っていた。
そう、

可未兔である。

「流石に体が痛いですね」

あの時、可未兔は落ちた。

そして、

下に有るゴミ袋が詰まったトラックの上に落ちた。

衝撃はそれなりだったがちゃんと知っていた。
毎週捨ててしていると。

可未兔はさっきまでいたトイレに入った。

携帯を少し弄ってから電源を切って鞆に入れる。
他の荷物もしっかりと入れる。

「…臭ってないよね？」

服に鼻を近付けてハアと息を吐いた。
少し臭かった。

「…許可を取って今日は体育着でやらせてもらおうかな？」

そして、可未兔は職員室に向かう。

心の中で嘲け笑いながら。

「居たっ!？」

慌てた様子の霰に周りの女子は頭を横に振る。
仕方がなく霰は近くにいた係員に話しかける。

「えっ…女の子? ああ、さっき走って行ったよ?」

若い男性の係員は汗を拭きながら頬を搔いていた。

「!？」

「でも…凄いビックリしたよ…まさかトラックに落ちてくるなんて
…」

霰は周りの女子達に目配らせをする。
女子達は頷いて走って行った。

「ありがとうございます」

霰は一言いって後を追う。

「うん…?」

残された係員は頭を傾げながら苦笑いをする。
彼に解答をあげる人は誰も居なかった。

「…ありがとうございます」

職員室から出た可未兔はロッカーから体育着を取りに教室に向かった。

その途中、「あつ陸々さん！」と声をかけられた。
可未兔は聞き間違いだと断定して足早に向かう。

「陸々さん！」

「何ですか？」

可未兔は足を止める。

息が荒い女子を見た可未兔は冷たい声で聞いた。

「…貴方…はあっ…生きて…！」

「当たり前です。残念でしたね」

可未兔はそう言うとスタスタ教室に向かう。

朝に絶叫を聞いたが、その女子トイレの周りにはファンクラブの女子達が集っていたので奈留茂は理解した。

（可未兔が…！）

だが、その思いに反して体は教室に向かう。

（何で…！？）

それから、

体育着姿の可未兔を遠目に見た。

体育着。

体育着っていう事は制服は…？

奈留茂の頭に可未兔が虐められる情景が映った。

助けなきゃいけない。

そう思った。

だが、

結局何もしなかった。

何て最低なんだろうと自分を責めた。

意味は無かった。

数時間経った今は放課後。

一生懸命演劇祭の練習をする皆に奈留茂は加われない。

気持ち的に無理だった。

今日は帰ると言って足早に家に向かう。

怖かった。

よく分からないが怖かった。

「可未兔…」

家に着いたら部屋に直行してベッドに体を埋めた。

そして、携帯を開いた。

『陸々可未兔』と書いてあるアドレスを見た。

「…?」

奈留茂は疑問に思った。

何で、可未兔のメアドなのにメアドの中にshiossaというワードが書いてあるのだろうか？

分からなかった。

電話をしよう。

奈留茂は可未兔の電話番号をクリックする。

『音声電話』という標識の所を再度クリックすると携帯からプルルルと元気な音が鳴る。

やがてプツツと音がすると「はい、陸々です」と返事が来た。

「なあ…可未兔」

「何ですか？」

「いきなりで悪いけど…家族は？」

奈留茂の問いに一瞬止まる。

「…家族？」

何ですか？それ？とても言いそうな口調に奈留茂は恐怖する。

「あつああ…何人家族？」

「三人です」

「可末兎はどうして独り暮らししてんだ？」

「親が二人とも居なくなつて、おばあちゃんの所で住んでいたらおばあちゃんも死にましたから」

「…学費とかは？」

「遺産で。どうしたんですか？」

「あつ…ありがと…な…」

「何で…いきなりそんな事を？」

可末兎の恐る恐るといった様子の声に奈留茂はビクツと震える。
勿論、可末兎には分からないと思うが。

「んっんん、気分転換、気分転換。いやーありがと」

「…そうですか。では」

深く聞かない可未兎は電話をブチッと勢いよく切った。
奈留茂の耳には可未兎の凜とした声は聞こえず、プープーと携帯の音しか聞こえなかった。

「悪いな…」

奈留茂も電源ボタンを押し、ポツリと呟いた。

誰も居ない家には良く響いた。

回想（前書き）

29日から学校なんで、

投稿遅くなります。

回想

何？

何があつたんだろう？

私が——である事が分かったのかな？

そうなのかな？

だったら……

私はアイツに嫌われたんだ。

潔く、

未練なんて捨てて、

生きていこう。

私なんかプライドなんか無い。

ただ、相手を否定出来れば良いんだから。

そう、私は別に良いんだ。

アイツに嫌われたって。

良いんだよ。

良いんだよ。

可未兔の視界がハッキリしてくる。

目を擦る。

（そうだ）

（昨日何か眠れなかったんだ）

（だから今、寝てたんだ）

周りを見渡す。

後数日後の演劇祭の為練習をしている皆。

可未兔は完璧だからもう良いと言われ、少し休んでいたのだ。

（そついや今日龍巻さん達何もしてこないなあ）

（放課後なのに）

熱気が体育館内を覆っている為か、可未兔は汗が吹き出ている感覚がする。

「今日は帰ります」

周りの生徒に頭を下げて、可未兔はトタトタ走った。

彼女の背中は何か弱々しい感じがした男子が居た。

気のせいだ、とすぐに思った。

その男子は、強い可未兔に惚れた。

でも、彼女も弱い所が有る事を少し分かった気がしていた。

それでも、今彼女とは話す気にはなれなかった。

例え今の彼女の悲しい背中を作ったのが自分だと気付いたとしても。

奈留茂は自分の練習をこなすと、すぐに家に帰った。

好きな少女の背中を見た。

奈留茂はそれを見送った。

そして、

帰った。

「…ただいま」

扉を開いて重苦しい口調で言葉を吐く。

「おかえりー」

リビングからの高い声の挨拶に奈留茂は相手にせず階段を上る。

「うわー無視？何て冷たい弟になっちゃったんだか」

栗色のクルンとしたシャンプーの香りがする髪を翻弄した女——奈留茂の姉、与実花^{よみか}は溜息を零した。

「レイカちゃんとか言う子と遊んでたアノ馬鹿は可愛かったのになー」

「どうすりゃ良いんだよ…」

ボフンツと顔を枕に沈める。

頭に浮かび上がった少女の顔は無表情だった。

「ばあちゃん…」

（ああ…あの頃は俺色々駄目だったなあ…）

ピーポーピーポー

単調な甲高い音が小さな少年、奈留茂の頭に響く。

少年は病院に居た。

少年はただ風邪で病院に訪れていた。

あつ救急車、と幼い奈留茂は目をキラキラさせた。

乗ってみたいなあと思いつながら、でも痛いのも嫌だしーと母さんと笑ったのを覚えている。

そんな、何時もの日常。

何もおかしくなかった。

今でもそう思う。

救急車から、

おばあちゃんが出て来るまでは。

「！？」

二人とも目と口が大きく開いた。

血だらけのおばあちゃんは担架に乗せられて、口に变なのを付けている。

母さんと奈留茂は病院に飛び込んだ。

そして医者からさっき起こっていた事を伝えられたり、その後警察が来たり。

でも、

そんな事どーでも良かった。

おばあちゃんが前みたいに笑ってくれたら。
それで、

良かった。

それ以上は臨まなかった。

でも、

神様は意地悪だった。

目の前に現れたのは――

冷たくなったおばあちゃんだった。

泣いた、と思う。

俺はその後から変わった。

一人で公園に行ってブランコに乗った。

その時、長い黒髪の女の子に会った。

少女も純粹そうな愛らしい顔を苦しそうに歪ませて、ブランコに乗っていた。

そこから良く覚えてないが、遊んだ。

その子は確かレイカちゃんだった。

変わった子だった。

その子は俺にバイバイと言うと重い足取りで帰って行った。
確証は無いけど。

そんな感じだった。

俺もその後ねいちゃんが来て帰った。

「あー…」

（馬鹿だなあ）

（可未兔は関係ないよ）

（信じなきゃ）

奈留茂は仰向けに寝転がると、

笑った。

虫けら（前書き）

深夜投稿すいません。

そして、

お休みなさいです（^ ^）。

虫けら

可未兔は現在、家に居る。

昨日奈留茂が座っていた所に腰掛けている。

（此处に座ってた…）

（アイツが…）

もう無い温もりを感じる可未兔。

『麻薬だと思います』と言った以前の自分の言葉に心の中で嘲るように笑った。

（アイツより…）

（私が中毒になっちゃったんですか）

携帯のデータフォルダに入っている新しいデータを見て可未兔は顔をしかめた。

（コレは…）

（そうだ）

（私も離れなきゃなんない）

「奈留茂さん…」

可未兔の言葉は、

届いたか届いてないか。

―次の日―

「ねえ陸々さん？」

クラスメートの女子の一人が朝読書中の可未兔に話しかける。

「何でしょうか」

可未兔は何時も通りその顔を見ず、単調な声だけ返す。

「あのさ…一緒にトイレ行かない？」

「何ででしょうか？」

「だって一人でトイレって怖いじゃん…」

お願い！と言いながら女子は手をすり合わせる。

（トイレすら一人で行けないなんて…）

（何年生ですか？）

（最近の女子は甘いねえ）

その最近の女子の年齢層には確実に自分が入っている事を可未兔は気にしない。

マイペースなのだ。

「分かりました」

全ての荷物を鞆に入れ、可未兔は立ち上がった。

「いや…荷物持ってかなくても良いんじゃないかな…？」

「自由です」

「はぁ…」

そんなこんなで以前服を脱がされたトイレに入った。
トイレの中には、

ファンクラブの方々が居た。

（まあおかしいとは思ったよねえ）

（幾ら教室の中に私しか居なくても、）

（私と一緒に居たくないだらうし）

「おはよう?」

「おはようございます」

ペコリと可未兎は頭を下げ、鞆に手をつ込んで、
ガチャガチャの丸いケースを取り出した。
そして、背を向ける。

「待ちなさい」

「何ですか?」

「そのクールに決めた顔、今にぶっ壊してあげるわ」

「結構です」

可未兎はドアノブに手を置いて、捻る。

だが、その動作は霰の部下——ファンクラブの女子に抑えられる。可未兎はその手を見て、

ガチャガチャを地面に打ち付けた。

ガチャガチャは落ちた途端パカツと割れる。

一瞬、霰達の視線がそこに向く。

その数秒間に可未兎は手を払ってドアを開けた。そして一步を——

踏み出せなかった。

ファンクラブの女子達が外で群がっていた。

「…通して下さい」

可未兎の願いは虚しく、

女子達は笑って可未兎の体を押した。

可未兎はトイレに無様に尻餅をする。

その拍子に鞆が可未兎の肩から落ち、床に散らばる。

「良い姿ね。貴方にピッタリ」

「ありがとうございます。貴方もやってみては如何ですか？」

「結構よ」

「残念」

可未兎は立ち上がって霰を見据える。霰も可未兎を虫けらのように見下す。

「雑魚はそれなりに足掻きなさい」

そう言ったらファンクラブの女子が可未兔を囲む。

「大手企業の娘の龍巻霰さんはこんなにレベルが低いなんて、考えられませんでした」

可未兔は舌を少し出す。

霰は見下した瞳を動かさずにただ、

睨む。

「ええ…この私、龍巻霰の行動に御不満があります？残念ですね。貴方にはそんな力はない」

「だったら作りますよ」

「不可能よ。だって貴方——」

見下したスタイルは変えずに、霰は口角のみを上げた。

「虫けらだもの」

精一杯憎たらしい笑みを浮かべた霰はファンクラブに抑えられ、地べたで自らを見上げる可未兔の髪をしゃがんでから、引つ張った。

「虫けらは虫けら。虫けらは虫けらしく言う事聞けば良いの」

可未兎は霰の顔を見て――
溜息を思いつきり吐いた。

「虫けら虫けら虫けら……貴方は言葉のレパトリーが少ないですね」
哀れな視線で霰を睨んで、
可未兎は口から言葉を紡ぐ。

「大体、貴方その虫けらに喧嘩ふっかけて、しかも大人数でやって
良く惨めになりませんよね。感心しますよ」

「はっ……？ 貴方何言ってるのか分かってるの！？ この私にそんな事
言っただで済むと思ってるの！？」

霰の口から怒りが飛び出てくる。
だが、

可未兎はソレをものともしない。

「貴方は三流の言葉しか言えないんですか？ 因みに言わせて頂きますと、貴方――龍巻霰は私と同じ人間でしょう？ 他人を虫けら虫けら言っ……素晴らしい程低レベルですね？ 感動、感服致します」

「今に見てなさい！」

そう言うのと、抑えてないファンクラブの女子達が可未兎を蹴り始めた。

可未兎は叫びもせず、ただ目を瞑り、事の成り行きを頭に浮かべた。
可未兎の白い足に上履きの後が付く。
制服も少しずつ汚れていく。

「もう良い。私がやる」

霰の言葉に周りの女子が離れていく。
霰はうつ伏せにいる可未兔の腹を、
蹴った。

「けほっ…」

可未兔は口を覆った。

霰は清々しいように笑った。

霰は次に可未兔の手を潰す。

可未兔はミキツと嫌な音が体中に響いた。

「つつ…」

それでも叫ばない。

悲鳴をあげない。

あげたら負けと言わんばかりに、
叫ばない。

霰は無邪気な子供のような顔で可未兔に暴行を続ける。
時間が許す限りずっと。

「龍巻さん、時間です」

その言葉に霰はハアと溜息を零した。

「もうコレで終わりだなんて…以前みたいな悲鳴を聞きたかったわ」

「こほっこほっ…残念ですね」

「そうね…また」

そう言つて、可未兔を残してファンクラブ達は廊下に消えた。可未兔は服の汚れを払つて近くで落ちている携帯を取った。携帯の安否を確かめると、可未兔は満足そうに頷いた。そして、荷物を鞆に戻し教室に向かう。心の中で笑いながら。

虫けらは、虫けらしく生きる。

そう、

生きるのだ。

虫けら（後書き）

そういえば忘れてました。

私、明明後日から試験一週間前の為投稿出来ない可能性があります。

すいません…p(´、´q)

レターとマイクロSSD（前書き）

短いです。

…すいませんです。

レターとマイクロSD

「社長っ！」

「…なんだね。今はパーティー中だぞ？」

大手企業社長——龍巻^{たつまきやうすけ}想助はあからさまに顔を歪まして部下を見つめた。

今日は他の企業との社交パーティーみたいものを行っていた。

「ハアツハアツ…良いから来て下さい！」

部下の言葉にムツとした社長は部下の頬を叩いた。
部下は無様に床に転がる。

「何時から命令出来る立場になったのだ。フンッ」

「どうぞ、お気になさらず」と言った社長はプライベートルームに向かう。

「…すみません」

納得出来ないような顔で床を睨んだ部下は謝罪の言葉を述べると立ち上がって社長の後ろに付いた。
プライベートルームに着いた社長はソファに尻を沈めて部下を見上げた。

「…で、何があった？」

「手紙が来たのです…」

「手紙？」

部下の答えに社長は眉間に皺を寄せた。

「はい…コレです」

『大手企業、タツマキアフター様へ』
とシンプルに書かれた封筒を渡される。

「君はコレを読んだのだな…？」

キツと忌々しいように睨む社長に部下は頬に汗を垂らした。

「…はい、社長が以前自分に言う事は大事なモノのみにしろと言われたので」

その答えに社長はフンツと息を吐くと中から紙を出す。
ついでにマイクロSDが出てくる。

『大手企業龍巻想助様の娘、龍巻霰様に御世話になっている者です。どうか、イジメを止めて頂けると嬉しいです』

と簡素に書かれたなめらかな文字が並んでいた。

社長はマイクロSDを睨んで「見せろ」と言った。

部下は大きく頷くと自らの携帯に社長から預かったマイクロSDを入れる。

中にはボイスとムービーが入っていた。

「…どうぞ」

部下はムービーを見せた。

社長は画質の悪いムービーに顔をしかめながら見ていた。

最初の時は「なんだコレ」と嘲るように笑っていた社長の顔は見終わった時には焦りで顔中に汗を流していた。

「…社長？」

「娘を呼べ！娘を呼ぶのだ！」

「パーティーは…？」

「そんなの今すぐ中止だ！良いから霰を呼べっ！」

「はっ！」

部下は忙しなく外に出て行った。

「何をしているんだ霰…」

拳を震わせて言った社長の言葉は酷く苦しそうだった。

さて、

コノ手紙の主は――

誰
？

レターとマイクロSD（後書き）

そういえば、

お気に入り登録の方が増えました！！

ありがとうございます！！

安心——？（前書き）

スイマセン、長い間書かずに。

そして短くて……

いよいよ来週試験です……。

遅くなります……

安心——？

可未兔は携帯を開いた。

いよいよ明後日【演劇祭】が始まる。

楽しみとか、恥ずかしいという気持ちは無い。

ただ、ありがたいと思った。

可未兔は携帯を鞆に仕舞って教室に向かう。

数日間霰によるイジメは無かった。

これが毎日だったら良いのに。

少し、思った。

だが、

その感情はすぐさま消えた。

アイツ——奈留茂と離れたままで楽しいのかな…？

可未兔は頭を振って静かに着席した。

まだまだホームルームまで時間がある。

朝の日課に疲れた。

今日は寝よう。

体重を全て机に乗せる。

力が抜けていき自然と瞼が重くなる。

「…な…るも…ば…か…」

口から勝手に出た言葉の意味を自分でも理解出来ずに意識は無くな
った。

この優しい、温かくなる、自然と笑えそうな、この感情は——

まだまだ可未兔には分からない。

奈留茂は重い足取りで学校に向かう。
いや、気持ち的には全然余裕と言っても過言では無かった筈だ。
勿論それは自分のせいだとは思う。
だが……

何があつたかと言つと――

「……よしっ!」

奈留茂は携帯との戦を終えた。

寝るのも忘れて考えて考えて、考え抜いて書いたメール。
携帯に表示されてる時刻を見た。

午前三時四十三分、と書いてある。

奈留茂は携帯を置いて朝にメールしよう、という事で寝た。

「――も――て」

（何だよ……？）

「なる――お――」

（んっ？）

「奈留茂起きて」

奈留茂は目を開けた。
目の前には母が居た。

「…母さん？」

「学校よ」

「んっ…ああ…」

「ああ、それと」

「？」

ドアを開けて下に下りようとした母はニコツと笑った。
奈留茂の背筋にゾツと何かが通った気がした。

「女の子にメールは出来る限り優しい感じでね？」

母はルンルンと鼻歌を歌いながら下りていく。

奈留茂は急いで携帯を開いた。

送信ボックスにある頑張って書いたメールはまだ未送信だった筈。
だが、そこには何も無かった。

無くなっていた。

四時間頑張って考えたメールの文は消えていた。

「うわぁっ！！！！」

奈留茂は今日程、

母の存在を最悪とは思った事は無かった。

忘れられない1日となった。

刃物（前書き）

遅くなってしまつてすいません！！

お気に入り登録して下さい方達に失礼でした！！

すいません！！

そして――

物語急展開！！

刃物

奈留茂は教室に入った途端顔をしかめた。

何故なら――

「何の用、龍巻？」

そこにげっそりした様に猫背の少女――龍巻霰が居たからだ。

龍巻霰は性格が酷いが、それなりに顔は整っていた。

むしろ美人と言っても過言ではない。

だが、今の彼女には合わない言葉だった。

荒れた肌は以前麗しく、滑らかな肌とは思えない。

大きな瞳は明後日の方向を見、だが何も映ってない。

その瞳の下には一目で寝ていないと分かるくまがあった。

つまり、

数日前気取っていた少女には到底見えなかった。

「奈留茂君……」

霰はしっかりとした足取りではなく、歩く事に一生懸命のような、
つらそうな、強張った顔で奈留茂に近付いた。

そして、抱きついた。

「ああ……奈留茂君……」

顔を上げて口だけを不気味に笑わせた顔に奈留茂は寒気を感じる。

「……何だよ？」

「奈留茂…一緒に行こ…」

奈留茂は眉間に皺を寄せた。

「はっ？」

「私と一緒に…転校しない…？」

霰の唐突のお願いに奈留茂は間髪入れずに頭を横に振った。

「俺はお前と一緒になんか御免だ」

「やっぱり…じゃあ…？」

口角を更に上げて不気味に笑う霰。

寒気を感じた奈留茂は霰を引き離そうとした。
だがその前に、

背中になにかが生えた。

「えっ…？」

奈留茂は自分の脇腹を見た。

赤い模様が広がっていた。

脈打っているのが直に分かる。

ドクンドクンと。

痛いという感覚は最初はあまり感じなかった。

だがゆつくりとだが痛みが広がっていく。

口から赤い液体が吹き出た。

霰の腰に回された手が解かれる。

奈留茂の体が崩れた。

朦朧していく意識の中、奈留茂は周りを見た。
クラスメートが一人も居ない。

（…そういうやファンクラブの奴も居ないから…）

（そういう事か…）

そんな事が分かれると奈留茂は自然とにやける。

（馬鹿だ…俺は…）

「か…みと…」

奈留茂の瞼は霰を見るのを拒むようにゆっくりと視界を無くしていった。

「…奈留茂君が悪いのよ…」

ニヤツと笑う。

手が震えているのは気のせいだろう、と霰は頷いた。
唾を呑む。

もう、終わりだ。

奈留茂と会えないなら、

もう、終わり。

数日前に父から言われた言葉。

「転校しろ」と。

嫌、と言った。

だが、父は私にマイクロSDを渡して仕事に戻っていった。

私は慌てふためく頭をフル活用してとりあえずソレを見た。

私があの子をいじめている映像と、あの子が偽自殺をした時の音声があった。

アイツ…

憎い、と思った。

でも、その前に奈留茂君を説得して一緒に転校しなきゃ。

私が壊れちゃう。

私は奈留茂君があつての私。

奈留茂君が居なきゃ生きる意味が無い。

…一人で死のうか？

一人…？独り…？

独り…？

独り…？

独り独り独り独り独り独り独り独り独り独り独り独り独り

独り独り独り独り独り独り独り独り独り独り独り独り独り独り独り
独り独り独り独り独り独り独り独り独り独り独り独り独り独り独り

「うわあああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

嫌だ嫌だ嫌だ!!

独りは嫌!!

私は…死ぬんだったら…奈留茂君と…

そうだ。

一緒に死ねばいいんだ。

死のう。

奈留茂君が一緒なら恐くない。

死のう。

霰は震える瞳で手に収まっているカッターを見た。

奈留茂の血がべったり付いたカッター。

さっきは袖の中に隠していたけど、

大成功。

「私も…今逝くから…」

霰はカッターを首の前にセットした。
そして、

首に！！

「何やってるんですか？」

落ち着いた言葉が霰の耳によく響いた。

霰はドアを見た。

可未兔が居た。

可未兔は鞆の中の携帯出して、耳につけながら「救急車お願いします」と短く言って切った。

可未兔は鞆からハンカチを出して奈留茂の腹に押し当てた。
ハンカチが少しずつ赤くなっていく。

「何…やってるの…？」

「応急処置です」

可未兔は冷静に答えた。

目の前で血だらけの同級生が居るのに、
冷静だった。

「…」

霰は口をぽかんと開けた。

可未兔はそんな霰を見ずに片足の靴下を脱いで、奈留茂の腰に巻きつけてハンカチを固定した。

可未兔の手や制服は全て赤くなっていく。

そして可未兎は奈留茂の胸に手を当てた。
そして、押す。

心臓マツサージだ。

「何やってるんですか？」

可未兎は霰を瞳だけ動かした。

静かな、冷静な声に霰は更に震えた。

「何やってるんですかと聞いているんです」

「何って……」

霰はオロオロし始める。

「貴方は自殺の為に、貴方にとって愛する人に刃物を刺したんですか？」

霰の動きが止まった。

「貴方は自分の我が儘の為に他人を殺そうとしたんですか？」

可未兎の淡々とした言葉は続く。

「貴方は、刃物を刺せる程度の愛だったのですか？この人——奈留茂さんが」

霰は目を見開いた。

「自殺は勝手にどうぞ。別に死にたいのならどうぞ。ですが、」

可未兎は頭をあげた。

睨みつけるように細められた瞳には僅かに怒りが籠もっていた。

「生きたい人を殺さないで下さい。それともう一つ」

可未兎は視線を奈留茂に移した。

「死にたくないのに死んだ人も居るんですよ。例えば、私の母が」

霰は崩れた。

ヘタツと力無く。

「やめて下さい。それだけです」

可未兎は一生懸命心臓マッサージをする。

学校に救急車の高い音が響いた。

刃物（後書き）

奈留茂平気ですかね…？

待機時間（前書き）

全然書かなかったんでまたまた投稿！！

読んでくれると嬉しいです！！

待機時間

その後、救急車に奈留茂は乗せられていった。

救急車の方々が通る道には生徒が烏合の衆として固まっていた。

奈留茂の血で赤くなっていて、片方靴下が無い可未兔の冷静な「邪魔です」という一言がなければきっともつと時間がかかっただろう。ファンクラブの女子達は「奈留茂君！」と駆け寄ろうとしたが、可未兔が救急車の方々の横に並んで周りを睨んだ事により近づく女子は声を出すだけだった。

可未兔は血色悪い奈留茂の顔を見た。

可未兔は僅かに眉間に皺を寄せた。

もし、ファンクラブの女子が他の生徒を抑えなければ。

私が龍巻さんに演劇祭についてもっと早く聞こうとすれば。

奈留茂はこんな事にならなかったのかな。

可未兔は頭を横に振った。

関係ない、と。

可未兔は救急車と一緒に乗せてもらう。

救急車のドアがしまる時、外を見た。

外には霰が先生に囲まれていた。

一人の先生が携帯を手にしている所だからきつと警察に電話しているのだろう。

白く、狭い救急車は走った。

その救急車は――

鳩のように純白だった。

救急車は……

鳩のように平和をもたらしてくれるのだろうか。

この二人に。

哀れな二人に。

姉の与実花は急いで病院に向かった。

あの馬鹿で元気な弟が刺された、と学校についた時に先生から言われた。

一人の先生が車を出してくれた。

急いで奈留茂が居る手術室に向かった。

【手術中】と赤く光っている灯りは血のようだ。

「奈留茂……」

与実花はヘタツと座り込んだ。

携帯が光る。

母は仕事場からなので遅くなるというメールが来たのだ。

そんな事はどうでも良い。

ただ、弟がまた笑ってくれれば。

「もう…嫌…」

頭をあげた時にやっと与実花は気付いた。

血だらけの少女がソファに座って俯いている事に。

何で片方靴下を履いてないのかな、と場違いかもしれないが少し思った。

血だらけの少女は与実花の視線を気付いたらしく、重そうに頭を上げて、「こんにちは」と言った。

与実花はふらつく足取りで少女に近付いた。

「…誰？」

「陸々可未兎です。 淚香和奈留茂さんの同級生です」

「貴方が…奈留茂にこんな事したの？」

与実花は空回りばかりする頭で思った事をすぐに口にした。
失礼、とは少なからず理解していた。
だが、これでも理性は保っている。

「違います。 残念ですが、私は救急車を呼んで応急処置したので」

鈴のように綺麗な声は真っ直ぐな言葉を作る。

「それは…すみません…」

与実花は頭を下げた。

可未兎は頭を横に振って、「気にしてません」と言った。

「奈留茂はっ!？」

遅れて奈留茂の母——るいかわふみよ涙香和風美夜がやって来た。

鬼の形相で走って、可未兔の前に止まると肩を掴んだ。
可未兔は頭を横に振って、「分かりません」と答えた。
風美夜は崩れた。

キャリアウーマンのような着込んだスーツに皺が寄る。
綺麗な茶髪の髪をおだんごにした髪型が少し崩れていた。
風美夜は瞳から塩味がする水を流す。
流す。

それを見た与実花も崩れ、母と同様に雫を垂らす。

可未兔はただ、立って二人を見る。

何も言わず、励まさず。

分かっているからだ。

励ましたって意味が無い事を。

無駄に希望を与えてはならない事を。

可未兔は手術室を見た。

長い長い時間はゆっくりと、ゆっくりと過ぎていく。

血だらけの服（前書き）

短いです。

血だらけの服

【手術中】と書かれていたランプの光が消える。

与実花と風美夜は絶望したように俯き、ただ手を握っていた為気付いていない。

可未兎はずっとドアを見ていた為気付いた。

「…あつ…」

立ち上がる。

それに気付いた二人もランプが消えている事に気付く。

重そうな扉が軽々しく開く。

中から眼鏡の優しそうな顔をマスクで隠したおじさんが出てくる。

「奈留茂は!？」

風美夜が首を絞めるような勢いで医者らしき人にしがみつく。

「成功ですよ」

につこり笑った医者は漫画などに定番の台詞を述べた。

それを聞いた風美夜は「ああつ…」と呻くと崩れ、嬉し泣きをした。与実花も「ありがとうございます!ありがとうございます!」と何回も頭を下げた。

「いやぁ良かったですね。後数ミリで内臓を傷付けててましたよ。早く連絡が来た御陰で出血死にもならず。その方は素晴らしい

判断でした」

医者は血だらけの可未兔を指した。
与実花と風美夜は「ありがとう…ありがとう…」と可未兔にも礼を述べた。

「無事で良かったです。安否も確認出来たので、私は学校に…と言いたい所なんですが、奈留茂さんに巻いた靴下返して頂けますか？」

「はあ…構いませんが、どうして？」

医者が疑問を口にした。
与実花と風美夜も頭を傾げる。

「家でなら冬に着れそうですから」

「…えっ？」

思わず絶句する三人に今度は可未兔が頭を傾げる。

「何かおかしいでしょうか？」

「いや…それは…」

「無理ですかね？」

「…無理です。刺されたのならもしかしたら証拠になるかもしれませんが…大体もう血が固まって使い物にはなりません」

「そうですか」

可未兔は頷くと「お大事に」と言って頭を下げ、三人に背を向けた。

「…何処に行くのですか？」

与実花は可未兔の肩を掴んだ。

可未兔は振り向いて「学校です」と言った。

「…学校？」

「はい。一樣人命救助という事で欠席とはなりませんが、念の為に龍巻さんから無償で制服を頂けるかなどの交渉に」

与実花は可未兔の答えに絶句し、可未兔を掴んでいた手の力が抜けた。

その隙に可未兔はその手をそっと払うと学校に向かった。

「…不思議な子ね…」

風美夜の言葉に医者と与実花は静かに頷いた。

ジャラジャラと奈留茂が乗せられている担架の音が聞こえる。

もみ消し、取引（前書き）

いやあ、台風のお陰で午前授業でした。

体が怠くて良く眠れました。

深夜投稿しません。

もみ消し、取引

可未兎は病院を静かに出た。
そして、

可未兎は前を睨んだ。

「待っていましたよ」

そこには龍巻想助が笑顔で立っていた。

「どうぞ、車に乗って下さい」

可未兎は促されるまま車に乗った。

可未兎の動きを最後まで確認してから想助は助手席に座った。

「出発しろ」

男に短く命令すると車を発進させた。

「何でしょうか」

可未兎は窓を開けた。

血の匂いが充満した車内が清潔になっていく。

可未兎は空を眺める。

鉛のように重たげな雲は今にも落ちてきそうだ。
ポツリ、ポツリと音が車からする。

可未兔は思った。

雲が落ちたのかな、と。
が違う。

それは雨だった。

「用件は後で話します」

丁寧に彩られた言葉はこの男、想助には合わない、
可未兔は感じる。

「貴方は龍巻想助さんですね？」

「いかにも」

想助は頷いた。

可未兔はミラーを見た。

鏡越しに目が会う。

視線と視線が一つに結ばれる。

「今龍巻さんは？」

「霰は病院です。心が乱れている」

「乱したのは貴方ですか？」

可未兔の言葉に想助は笑った。

「私もそうかもしれませんが、貴方——〇〇〇さんも、でしょう？」

可未兔の眉がピクツと動く。

想助は見逃さない。

「いやあ、まさか霰と同じ学校とは。感服致しました」

「それはどうも、お褒めに預かり光栄です。で、私のソレを言っ
て何がしたいんですか？」

「交渉ですよ」

想助は口角をあげた。

口裂け女、いや男かな。

可未兎は心中で嘲るように笑った。

可未兎はまっすぐにしていた背中を緩ませた。

（この程度か）

（この人もこの程度か）

（苦しみを知らない）

（それこそ生き地獄だよ）

（アレがした事は）

「で、…何がしたいんですか？」

可未兎の問いに想助は言葉ではなく、物で答えた。

「貴方がマイクロSDを所持しているんですね？ソレと交換したい
んですよ」

「構いませんよ。どうぞ」

可未兎は紙幣を数える。

50枚、福沢諭吉が並んでいた。

可未兎は偽札ではないか確認すると、「どうぞ」とポケットから出しながら言う。

想助は笑った。

「それと、龍巻さんは学校をやめますよね？」

「勿論です。貴方は霰からイジメを受けていたので、後で更に渡しますよ」

想助は笑った。

事が上手く進む事に。

「この事は？」

「表には出ないでしょうね。ちゃんと手配しましたから」

「早いですね。行動が」

「ええ。仕方がありません。それと、どうぞ制服です」

想助は可未兎に渡した。

紙袋には丁寧に包まれた新品の制服が入っていた。

可未兎は無造作に沢山の福沢諭吉を入れた。

「あのデータは他に有りませんか？」

「ありませんよ。信じられないなら嘘発見器でもやりますか？確かアレは嘘をつく時の脈とかで分かるんでしたっけ」

「そんな感じですよ。まあ、警察の方々に言つときましようか。貴

方は嘘がお得意そうですから」

可未兔は上品な手つきで頬に手を添え、「そんな事ありませんよ」と言う。

「さて、学校に着きましたよ」

「ありがとうございます」

可未兔は形だけの感謝を述べ、下りる。

「穩便にお願いしますよ」

窓からひよっこり頭のみ出した想助に可未兔は無表情に言った。

「貴方ですよ」

「では」

車は走り去る。

残ったのは雨で濡れていく可未兔と紙袋だけ。

可未兔は思った。

『穩便にお願いします』

あの言葉は悲しくも、

以前霰に言った言葉。

「穏便にならなかったからこうなったんですよ」

静かな雨はまだまだ止まない。

雲は嵐を巻き起こす。

途切れない意識の中（前書き）

今回は奈留茂の心の中です。

短いですよ？

明日休みだわーい。

途切れない意識の中

血が流れるのが分かる。

薄い意識は後少して切れそうで、でも切れない。

もし、俺が霰と一緒に転校する事に承諾したらこんな事にならなかったのか。

俺が霰と笑えば良かったのか。

俺が可未兎と笑わなきゃ良かったのか。

痛みのみがはつきりする体。

瞳すら色を認識する事を拒んでいるのかばやばとして、何が何だか分からない。

でも、

思考だけは止まらない。

「か…みと…」

勝手に出た言葉で、

理解した。

間違っていない。

俺は可未兎と会って間違っていない。

可未兎は、

スツゴい奴だ。

一人で何もかもして、

一人で何もかも解決する。

そして、俺のせいで行った事も一人で解決した。

そんなアイツに何責任押しつけてんだよ。

馬鹿野郎。

つつ事はコレはきっと天罰みたいなもんかな？
なら、

甘んじて受けようじゃないか。

何故だろう？

はつきりしない耳がクリアになっていく訳でも無いが、
可未兔の声がする。

もしかして、

頭狂ってんのかな？

こんな都合の良いときに可未兔の声がするわけねえよ。

…あり？

ぼんやりしている視界の中に、

俺にとつての天使が見える気がする。

気のせいかな？

何かが腹に当てられた感じがする。

もう、痛みは無くなつた。

アドレナリンって奴かな？

「——刃物を刺せる程度の愛ですか？」

この言葉、

まるで、

俺の事好き、

って言ってるみたいだ。

なんとなく、嬉しいな。

可未兔の顔が俺に向かう。

可未兔…。

ごめんな。

悪かったから、

そんな悲しい顔しないで。

そんな、泣きそうな顔しないでよ。

可未兔にそんな顔似合わないから。

何時もの、

凜とした、

全てを見透かすような、

落ち着いた、

悩みなんか吹き飛ばしそうな、

つまらない顔で俺を見てくれよ。

途切れない意識の中（後書き）

お気に入り登録がまた増えました

感謝感激です！

異常な異常な人形劇の幕開け（前書き）

なんかこの頃短いなあ。

異常な異常な人形劇の幕開け

可未兔は教室に入る。

クラスの中の全ての人間の視線が自然と集まる。

「すみません、遅くなりました。着替えてきたもので」

そう言った可未兔の服は新品なので、皺があまり無く、凜とした可未兔にはピッタリだった。

先生は「色々おつか：座りなさい」と慌てた風に言い直した。それはそうだ。

奈留茂が刺された事は、事故なのだから。

奈留茂は誰かが机にカッターを忘れ、運悪く、

深く突き刺さったのだから。

それを可未兔が助けて、

奈留茂の事が好きな霰がショックを受けて、病院に行つて、

奈留茂を助けてくれた可未兔に霰の父がとうと、それでお金を受け取ったのだから。

事故なのだから。

「色々お疲れ様」という言葉は少しおかしいのだ。

「分かりました」

可未兔は椅子に座ると鞆から教科書を出した。

そして、
何時も通りの授業。

少し、
ぎくしゃくしたものだっ

た。
可未兎は空を眺めた。

空は変わらないようで変わっている風景を見せつけるように真っ青だ。

真っ青だ。

可未兎は齒に力を入れた。

何が何時も通りだ。

何が普通の日常だ。

私の普通の日常には、

一人の登場人物が居るんだ。

要るんだ。

そして、

可未兎の普通の日常は、
旅立つ。

青い青い空へと。

手術が終わった奈留茂は一人部屋で寝かされていた。

口にはテレビで良く見るプラスチックのような透明な物が置かれてある。

与実花と風美夜は側で緊張した顔でずっと立っていた。

座る、

という動作をする余裕さえ無い。

動けない。

近付こう、

とは思う。

でも、

それで一秒でも奈留茂を見ないで、

心拍数やなんやらが全て零になったら？

すぐに助けられず、

奈留茂が死んだら？

二人の心配は様々な空想を作り上げる。

医者から心配される位、

二人は瞬きさえやらない。

目を見開いている。

異常、

今の二人には良く合っている。

一回親族を亡くした事のある二人には、

あの虚無感に、

耐えた。

だが、

それで何もかも壊れた。

父とは、

離婚した。

仕事で全てを忘れようとした母は家事を放棄した。

それに父は怒り、

消えた。

おじいちゃんは、

頭が狂った。

あれから、

全てが狂った。

もう、

嫌だった。

全てがおかしくなるのは、
嫌だった。

だから二人は、
異常になった。

いや、

普通とは有るのだろうか？

コノセカイニ。

コノ、

オカシナ、

オカシナ、

クルッタセカイニ。

サア、

クルッタ、

ニンギョウゲキノ、

ハジマリダ。

決意（前書き）

すっごく短いです。

多分、

その分早く更新します!!

決意

放課後、先生から「明日の演劇祭は無くなりました」と言う連絡を受け、可未兎達は家へと向かう。

(…)

あの言葉は、可未兎を苦しくさせるのには十分な言葉だった。演劇祭が無くなる、

これは予想通りだった。

何故なら、

霰達が何かしら起こすと分かっていたから。

あのデータによって。

だが、あのデータはあの社長を震え上がらせる程大変なモノだとは思わない。

けど、

もしかしたら、

あのデータのせいで嗅ぎ回られたら困るのモノが有るのだろうか？

だから、

潰す。

勿論、

アイツの為では無い。

私の為に。

可未兎は空を仰いだ。

鮮血を浸したような程真っ赤な空は可未兎を覆う。

「…返す」

借りは返す。

どうやってだつて。

手段は選ばない。

温もり（前書き）

やっと2ページ位のが書けた。

今回は普通だー！！

てか、

今回は早く書けたー！！

温もり

腹がズキズキする。

重い瞼を無理矢理上げさせた。

「んっ…」

小さな呻き声が出る。

もやもやする頭を実力行使で動かす。

腕には点滴が付けられていた。

「…へっ？」

口に付いてあるプラスチック製らしきモノが奈留茂の温い息で白く曇った。

「奈留茂…！」

「この…馬鹿…！」

そこには、

顔を涙で濡らした姉と母が居た。

二人の震える声で思い出す。

自分が刺された事を。

二人は奈留茂を覆っていた布団に顔を埋める。

「姉ちゃん…母さん…」

「ちょっと待ってて！先生呼んでくるから！」

真っ赤な瞳の下の隈を歪ませて、妖艶な笑みを浮かべた与実花は病室から走り去る。

風美夜はその背中を見て、「与実花ったら」とど突いた。でも、その顔は微笑んでいる――が、暗い。

「奈留茂…ごめんなさい…」

突然、風美夜は頭を下げる。

奈留茂は眉間に皺を寄せ、「何だよ？」と呟く。

「私達…負けちゃった…」

「はっ…？」

「龍巻グループに負けちゃったのよ…」

母は頭を上げた。

その顔は苦しそうに皺が寄っている。

そして、唇を噛み締めていた。

唇から赤い液が流れていた。

「負けたって…？」

「示談…で終わった…て事よ…」

風美夜の拳が震える。

その震えを見た奈留茂は後悔した。
母に、

こんな思いをまたさせてしまつて。
親不孝だな、俺。

「なあ……」

「何……かしら？」

母は笑みを浮かべた。
心と反比例している笑みを、
奈留茂に見せてしまう。

「……可未兎は？」

奈留茂は心の中で謝る。
でも、気になるのだ。
自分を救ってくれた少女を。

「か……かみと？」

風美夜はいきなりの人物名に頭を傾げる。

「俺を助けてくれた……」

俺が好きな奴、とまでは言わなかった。
風美夜は「あの……あの子ね」と言つて頭を傾げる。

「不思議な子……よね。奈留茂を助けてくれた事には感謝だけ……」
「？」

奈留茂は「どうかした?」と問う。

「正直言って…怖い…」

「…はっ?」

「…だってあの子、ずっと冷静…なんだもの…」

体を抱きかかえるように腕を握る。

「…冷静?」

「ええ…奈留茂の応急処置してから…らしいけど、その後…新しい制服欲しいとか…」

母は窓を覗く。

重たい雲からは雨が墜ちていく。

「はっ…」

「…はっ?」

「はははっ!」

奈留茂は笑う。

奈留茂は笑う。

母は頭を傾げる。

少し顔を引きつらせながら。

奈留茂は自らが重傷である事を気にしないように笑う。
屈託の無い笑み。

「はは…。アイツらしいな…」

奈留茂は窓を見た。

雨は消え去り、雲の隙間から光が零れていく。

「母さん」

「…何？」

「俺、そいつの事が——」

奈留茂は幸せそうに笑った。

風美夜はそれにつられて微笑ましいように笑った。

「好きなんだ」

風美夜は驚いたように目を見開く。

だがすぐに目を細め、自分を抱いてた手を下ろす。

「そう」

風美夜は奈留茂の頭を撫でた。

「…変か？」

「確かに…私は怖いと思ったのに、貴方が好きって少し違和感があるわ。でも、貴方にそんな感情芽生えるなんて素晴らしいじゃない。この馬鹿のくせに」

母の温もりに息子は驚く。

やがて、「ありがとう」と言葉を呟いた。

「来たよ、先生！ごめん、ちょっと遅くなっちゃった」

与実花がドアを勢いよく開けてやって来た。
その姿に奈留茂は笑った。

家族って、

温かいな。

関係（前書き）

頭の中のが文字に出来ない病発生中！。

つか、

此処らへんの内容は勘でやってる洒流奇。

それでも頑張ろー。

関係

「はあ…」

自然と零れる吐息を止める事も無く可未兔は振り返った。
少し家から離れた所には男が突っ立っている。
あの男はおそらく龍巻グループの一人だろう。
可未兔が変な事をしないか監視をする。

「明日は演劇祭が無くなったですし…」

一樣表沙汰にはなっていないが、
こんな時に出来る訳が無い。

「奈留茂さん…」

可未兔は無表情な顔を歪ませた。
辛いな、
なんとなくの感情が絞める、
自分の首を。

逢いにいきたい？と誰かが囁いている気がする。
窓から外を仰いだ可未兔に冷たい月は笑うように煌めく。

「明日…」

可未兔は頷く。

明日、お見舞いに形だけでも行こう。
そして、

全てを終わらせようと。

自分が起こした事は蹴りをつけよう。
自分で。

そうしたかった。

が、

仕方が無い。

アイツ等の顔から余裕綽々の表情を奪い取る為には。

「奈留茂さん……」

再度呟いた名を噛み締める。

もう、

関わらない。

明日逢ったら関わらない。

これが、

けじめ。

私なりの。

「母さん、林檎とか明日ちよーだい」

「駄目。まだ本調子じゃないんだから」

奈留茂はブーと言いながらアヒル口を作り上げる。
そんな奈留茂の姿を風美夜は微笑ましいように眺める。

「母さん母さん」

「はいはい。何？」

「姉ちゃんは？」

「学校」

たわいもない会話がしばらくの間続く。

既に取りれたプラスチック製のモノのお陰で伸び伸びとする奈留茂。

「俺って何時退院だっけ？」

「まだまだ。少しリハビリもしなきゃね」

「まぢか」

奈留茂は溜息を漏らすと「つまんないなあ」と言葉を零す。

「病人は文句を言わない」

「てか…母さん大丈夫？」

「何がかしら？」

風美夜は頭を傾げる。

奈留茂は気まずそうに口を開く。

「金とか…だって俺の看病のせいで全然働いてねーし、寝てねーし…」

目が思わず逸らしてしまう奈留茂は現在、母を見れない。

「大丈夫よ」

奈留茂は驚きを隠さずに風美夜を見る。

優しげに微笑んだ風美夜。

少なくとも偽物には見えない。

「まじか…良かった」

奈留茂も笑う。

そして、

苦しそうに息を吐いた。

「どうかした？」

「いや…何でもないよ——」

奈留茂は精一杯口角を上げた。

「母さん」

風美夜は奈留茂の顔を見て、
微笑んだ。

分かり合えない。

分からない。

互いに隠した感情。

だが、

その感情は隠しきれてない。

でも、

気付かない。

それが、

人間の

関係。

関係（後書き）

因みに、

時間的に言つと夜中です。

男は可未兔のアパートのちよつと離れた所で監視中！。

お願い（前書き）

普通位の長さです！

そして今気付きました。

四十話位書いてたんだ自分。
意外と凄いなあ。

感想お待ちしております

よってね。

お願い

授業が始まる。

無くなった演劇祭の代わりにはありきな授業が。

変わらない。

気にする奴は居ないんだな。

思わず苦笑してしまいそうだ。

教科書を読めば理解出来そうな授業が全て終わるとゆったりとした動作で立ち上がる。

廊下に足を踏み出す。

静かに、冷静に。

誰も自分を気にする人は居ない。

でも、皆私から離れていく。

まるで寄せ付けないオーラを放っているのかのように。

「あつ…陸々先輩」

そんな中、一人の女の子が話しかける。

「はい。何でしょうか？」

業務的な言葉を吐きながら振り返る。

【先輩】と自分を呼んだのだから誰か位は分かった。

「あの、一樣連絡です。1ヶ月後ですけど、コンクールに…」

美術部の後輩である。

だが、何ヶ月も行っていない可未兔には忘れられている。

「お題とかありますか？」

「それは…これに書いてあります」

真っ白な紙に踊り狂った文字が並んでいる。

可未兔は頷いた。

「ありがとうございます」

可未兔は丁寧に言葉を選ぶ。

後輩は頭を下げると軽い足取りで廊下を滑っていく。

可未兔はその背を見ずに向かう。

一人の、自分の全てを変えた男の子の元へ。

「ちょっと母さん…用が出来たから出かけるね」

風美夜は申し訳なさそうに顔を歪める。

奈留茂は頭を横に振った。

「平気だから。じゃ、ついでに携帯貸して」

奈留茂は手を出す。

風美夜はハアと溜息を吐いた。

「ちゃんと使う場所は理解してるわよね？」

「勿論」

奈留茂は輝かしい笑みを浮かべた。

「……やっぱり信用出来ないわ」

母は視線を横に移す。

奈留茂は「何で!？」と吃驚したように目を見開いた。その直後、腹に通る電流のような痛みに顔をしかめた。運良く、風美夜は気付いてないようでクスクス笑った。

「取りあえず、今は三時四十分だから……六時位には帰るわ」

風美夜は手を振ると病室から出て行った。

風美夜が去ったドアを奈留茂は暫く見ていたが、視線を外に移す。静かになった病室。

何も出来ない時間が過ぎる。

奈留茂は溜息を零す。

起こしていた体を布団に沈めた。

柔らかい枕に頭がゆっくりと沈む。

「あーあ」

つまらない、と言おうとした時扉が開いた。

奈留茂はすぐに目を向けた。

「数日ぶりですね」

そこには、
逢いたくて、
謝りたくて、
感謝したくて、
好きな、
可未兔が居た。

「可未兔…？」

「嘘だろ…？」と驚きを漏らす奈留茂。
可未兔は溜息を零した。

「偽者に見えますか？そしたら私は何なんですか？」

呆れたように自らの顔に指を指した可未兔。
奈留茂は精一杯笑った。

「うん、可未兔だ！」

その元気な返事に可未兔はちよつぴり驚いたように目を開いたが、
やがて頭を横に振って「馬鹿」と小さく呟いた。
何を言ったか良く聞こえなかった奈留茂は頭を傾げる。

「今日はどうした——」

の？と言おうとした口に可未兔の手が覆い被さる。

「静かにして下さい」

さっきまで１メートル位あった距離がいきなり縮む。

冷たい可未兎の手に温かい奈留茂の吐息がかかる。

奈留茂は目をぱちくりさせ、頭を傾げる。

その頬は心なしか紅く染まっている。

可未兎は奈留茂の口から手を離すと鞆からノートを取り出した。

ついでに奈留茂のベッドに尻を沈める。

可未兎の新品の制服に皺が寄った。

奈留茂は熱を冷ますかのように頬を叩く。

可未兎はノートの上にシャーペンを滑らせる。

「業務連絡をしようかと思って今日は来たんですよ」

そう言つて可未兎はノートを奈留茂に見せる。

【私は今龍巻グループに監視されて身動きがとれません】

奈留茂の顔つきが変わる。

「まあ知ってるかもしれませんが…演劇祭が無くなったんですよ。あんなに練習させられて困りますよ」

「…」

すらすら言葉を流れるように出す可未兎に奈留茂はポカンと口を開けた。

可未兎は奈留茂が見た事を確認するとその文字の下に書く。

【ですからお願いがあるんです】

「だからまた何かやろーと言う人達が居るんですよ。演劇祭の代わりに何をしたいか聞いてこいって事で聞きに来たんですけど…構いません?」

「んっ…んん…」

奈留茂は頷く。

【嫌だったら嫌と言って下さい】

「嫌ですか？別に言いたくなかったら構いませんよ？意見言いたくない人も居るだろうし」

【どうします？】

可未兔の手にある黒く汚れてくノート。

「いいよ。可未兔の頼みだしな」

「ありがたいです」

「そうだな、やっぱり体育祭だよな」

奈留茂は可未兔の手のノートを受け取るとすらすらと文字を書いた。

【何をすれば良いんだ？】

「ありがとうございます。取りあえず、この紙に書いといて下さい。何時か回収するんで」

奈留茂の手に何かが乗せられた。

「何だ…これ？」

奈留茂は頭を傾げた。

「何って説明書です。後で見て下さい」

では、と言って可未兎は立ち上がって奈留茂の手からノートを取ると静かに去っていた。

「可未兎…俺は…？」

何すりゃ良いんだよ。

言葉を呑み込んだ奈留茂は愛する人が去った扉を見た。さっきの母を見ていた目とは全く違う目で。

自分の手にあるモノ——マイクロSDを見た。

奈留茂は頷いた。

可未兎、

俺はお前の為なら出来る限りの事はする。

だから、

逃げんなよ。

俺から。

奈留茂は笑った。

優しい笑みだった。

博打（前書き）

遅くなりました。

博打

扉から出ると、監視役だろうと思われる男がスーツを着込んで立っていた。

「白昼堂々ストーカーをするって凄いですね。感激です」

「私の仕事だ。ビジネスはビジネスだ」

男の瞳に宿った光に可未兔は負けじと目を細めた。
やがてお互いに目を話し、可未兔は足を動かした。

「本当に業務連絡ですよね？」

確認するように頭を傾げた男に可未兔は鼻で笑った。

「貴方は私達の会話を聞いていたでしょう？ だったらそんな事聞けないでしょう」

「…そうですね」

男は渋々頷いた。

可未兔は足の動きを早くする。

「ふん…」

男がすっかり自分の後ろに居る事を確認する。

無表情の男の分らない考えが可未兔の心を喰らう。

可未兔は頭を左右に振る。

惑わされてはならない。

私は惑わされては。

「あの、すみません。何時になったら貴方達からの呪縛は解けるんですか？」

病院を出ると沈みかけている赤い日が可未兔の顔を染めた。
不健康なように見える程白い脚さえ健康そうに見える位。

「貴方次第です」

ボソツと言った言葉に可未兔は携帯を出した。

「じゃあ、賭けませんか？」

「……？」

「貴方達と私の未来を」

「如何様な内容で？」

男は気まぐれに聞いた。

「そうですね…。じゃあ、どちらが先に動くか、って事で」

「私達は動かないでしょうから、貴方が先ですね」

即答した男の唇の動きを見て可未兔は少し頬を緩める。

「私は貴方達で」

「で、もし賭けに勝ったら？」

可未兎は太陽を見た。

太陽は分別せずに、全ての人間に光を見せ続ける。

「そうですね、じゃあ——」

可未兎は振り返った。

そして、口を動かす。

「大切なモノを壊す、という事で」

男は笑った。

「そんなの貴方出来るんですか？」

「出来ますよ」

可未兎は前を向いた。

夕日は沈んでいき、闇が濃くなる。

「私は沢山壊してきたんですから」

悲しげな言葉は良く響く。

「じゃあ、成立という事ですね」

男は笑った。

気まぐれのゲーム。

可未兎にとっても遊び心のモノ。

だから、

やりがいがある。

だから、

躊躇いもなく出来る。

中途半端な気持ち程、

最強なモノは無い。

良く知っている少女は、

世界を嘲るように微笑む。

未来は、

明るいのか、暗いのか。

登校（前書き）

なんかこの頃ほのぼのしたよーな、
違うよっな？

登校

可未兔は日々、当たり前前の様に、まるで何も無かった様に、過ごす。

学校を。

最近は学校の先生が自分の御機嫌取りを努めているのが分かった。ジョーダン先生は、ただ私の肩を叩いて「エライです」と何時もより流暢な日本語を零した。

皆、私を恐れている。

今、霰は病院で入院しているらしい。

嬉しい、とは素直に喜べないモノだった。

龍巻グループの監視は絶えない。

学校の中には居ないが、学校の外で見張り。

嫌になる、

正直な気持ちだ。

だが、

挫けてはいけない。

奈留茂さん、

早く動いて。

「陸々、どうした？ 2の（3）の答えは？」

「18です」

思考を無理矢理中断させ、事実を答える。

「田中、3の（1）は？」

「えー？私には分か――」

先生が次の人に目がやった時には可未兔は既に思考に浸る。

憂鬱な日々、

何時来るんだろう？

でも、

関わってはならない。

こんがらがった感情。

叫びたい。

抑える。

何時になったら、

私は、

『普通』って奴に、

なれるのかな？

窓から空を仰ぐ。

何て、

嫌らしい程綺麗なのだろう。

輝きを私に見せつけて。

視線を校門に落とした。

可未兔は目を見開いた。

握っていたペンが落ちた。

体が震えるのが分かる。

そこには――

「奈留茂、本当に今日から……」

風美夜は奈留茂を上目遣いで見る。

「勿論。早く行きたいんだよねえ」

退院し、家に着いた奈留茂は私服を脱いだ。
逞しい体が浮き彫りになる。

腹には、縫い目を付けて。

そして、
学生服をその上に被せる。

「…分かったわ」

風美夜は諦めたように溜息を吐いた。
与実花は笑った。

「奈留茂、肉食系の方が相手は弱いんじゃない？てかも肉食系男子だったか」

既に学校が始まっている筈なのに与実花は奈留茂の為に今日は学校を休んでいた。

「姉ちゃん、くだらない事言う暇あるなら学校行ったら？」

奈留茂は与実花の頭を叩いた。

「五月蠅いつ。私の頭は素晴らしいからテストは余裕なの。わざわざ授業でやる必要無い」

「そしたら学校必要無くな…？」

「安心なさい！」

与実花は屈託のない笑みを奈留茂に向ける。
奈留茂もつられて微笑んだ。

「お母さん」

与実花は風美夜の肩に手を乗せた。

風美夜はハアとわざとらしく溜息を吐いて微笑んだ。

「「いつてらっしゃい」「

温かい言葉が奈留茂の背中を押す。

奈留茂は驚いたように目を開いてから、顔を輝かせた。

「いつてきます」

「どうした陸々？」

「…先生、涙香和君が校門に居ます」

先生はえっ？と驚きの声を発してから窓にへばりついた。

「明日来る筈じゃ…」

「奈留茂君っ!？」

女子が次々と立ち上がる。

男子もつられて立ち上がった。

奈留茂は気付いたのか、頭を上げた。
そして笑って手を振った。

久しぶりの授業（前書き）

猛烈に遅くなりましたp（、、q）

すいません。

スランプで。

全然思い付かなかったんですけど、

やっと出来ました。

どうぞ、お楽しみ頂けたら嬉しいです。

久しぶりの授業

奈留茂は見張りに目を一瞬やっってから校門をくぐった。

自分の学年の奴らが窓から顔を出して笑っているのが伺える。

元気だなあ、と羨ましげに思いつつも奈留茂は校舎に入っていく。まずは自分の教室から、と思っていたが体は勝手に動いていた。D組のドアを開ける。

クラスの奴等はえっ？と頭を傾げる。

「淚香和…どうしたんだ？」

奈留茂は先生の言葉を無視し、一人の少女の元に向かう。

「…えっ？」

奈留茂は見つめる。

少女——可未兔を。

「会いたかった」

そう言つて奈留茂は可未兔に覆い被さる。

「えっ…？えっ？」

可未兔は驚きで他の言葉が出せない。周りからヒューと歓声の音が広がる。

「ちよつ 涙香——」

「可未兎…俺はお前の事が好きだ。だから…もう傷付いて欲しくない」

奈留茂の腕に力が籠もる。

注意をすべき先生は口をポカンと開けて叱るという行動が出来ない。

「奈留茂…さん？」

「だから…もう良いよ」

可未兎はピクツと震えた。

「もう…諦めようよ…」

「……す」

「何を——」

「無理です」

可未兎は奈留茂の腕にかけている手を握った。

「責任は全て私です。私は、異常。人間に、普通というボーダーラインは無いですけど…私は異常です。だから、壊れた」

可未兎は奈留茂の胸板を押した。

「私は責任を取る。その為なら、やります」

「駄目だ」

可未兎の力を上回る奈留茂は更に力を入れる。

「嫌なんだよ。俺は、お前とずっと一緒に居たい」

静かになった教室に響くのは奈留茂の声のみ。

「だから、付き合ってくれ」

その言葉は、周りの女子の心を壊すには充分だった。

男子も口を大きく開け、ただただ二人の成り行きを見守るのみ。

「無理——」

「自分を、お前を、守りてえんだよ」

奈留茂は可未兎から離れる。

二人の目が合う。

可未兎は咄嗟に目を伏せる。

だが、すぐさま奈留茂は可未兎の顎に触れ、クイツと上げる。

再度視線が合う。

その時には他クラスの人達が興味本位で窓から覗きこんでいた。

「付き合ってくれ」

そう言って奈留茂は可未兎の前髪を片方の手で分けて、キスをした。

額に。

「……!!」

可未兎は咄嗟の事で頭がパニック状態に陥る。
周りの生徒達にも衝撃が走る。

「どうする?」

奈留茂はしゃがむ。

座っている可未兎よりも視線が低くなる。

そして、まるで何処かの紳士的な男のように手を取る。

「Shall I dance?」

悪戯っぽく笑う奈留茂に可未兎は少し頬を赤く染め、返した。

「馬鹿」

「それはOKというサイン?」

「だっ駄目に決まってるでしょう!何言ってるんです。思い上がりないで下さい」

「わあ可未兎酷ーい。此処までさせて」

「……知りませんよ」

そう言いつつも可未兎はしっかり奈留茂の手を握っていたのであった。

奈留茂はそれを微笑ましいように笑った。

「でも、代わりに…あれを諦めて…」

「くれるの？」

「…やっぱり駄目ですね」

「可未兔のケチ」

「貧乏人を舐めないで下さい」

「舐めないから…それは諦めてよ」

「…どうしましょつかね…」

可未兔はそう言って、
奈留茂の頬を撫でる。

「ワン」

「犬ですか貴方は」

「ニャー？」

「馬鹿でしたね」

「可未兔酷いつ！」

「酷いのは貴方の頭です」

と小さな漫才が始まった。

「構わないんですか？私が責任取らなくても？」

可未兔は頭を傾げる。

奈留茂は頷いた。

「うん。だから、俺の事責任取って」

「馬鹿」

その授業は、

とある少女と少年の、

ラブ授業になったという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6630t/>

囲われた少女の瞳に映る外

2011年11月17日19時52分発行